

魔法主従まどか☆ギャラクトロン

ルシエド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『宇宙のためだ、などという言い訳は無用である』

『自然の摂理だ、などという戯言は無用である』

『人間を被食者とし、宇宙を頂点とする食物連鎖を成立させるインキュベーター』

『私は全てを破壊する』

目次

夢の中で……見た覚えがあるような無いような……（曖昧）	1
本当の気持ちと向き合え。でなければ死ね	8
こんなの絶対おかしいわ	16
美樹さんってほんとバカ	26
唐突に現れた道しるべ	39
そんなの、ギャラクトロンが許さない	47
もう何も怖くない	57
奇跡も、魔法も、あるんだよ	75
私の、最高の	96
黒き少女の祝福	113

夢の中で……見た覚えがあるような無いような……
(曖昧)

機械の竜が光を放つ。

それが無数の白い生物の群れを薙ぎ払った。

ここは海上。

母なる海の上で、人の手の上に乗るサイズの小さな白い生き物が、人を手の上に乗せられるサイズの巨竜に蹂躪されていた。

それは一方的な虐殺。

強く大きい者が、弱く小さな者を蹴散らしている。

にもかかわらず、蹴散らす巨竜の纏う雰囲気には、正義を実行しているという確信のようなものが感じられた。

「恐ろしいほどの残虐さだね」

『インキュベーター。君達の所業こそ、残虐と定義されるものである』
機械竜は白い生物を踏み潰す。

『この宇宙には、最初から有り余るほどのエネルギーが満ちている。
別の生物からエネルギーを奪わずとも済むように、全てがデザインされている。』

宇宙の延命を目的とした搾取は、宇宙を頂点とした残虐な食物連鎖でしかない』

「いや、これは奇跡さ。」

地球という小さな星の命を数えられる程度に消費する……

その程度で宇宙が延命できるという時点で、ありえない奇跡だ。

感情というエネルギーは凄まじいよ。これは、条理を超越している』

『自然に発生する命の多くは、発生した瞬間から終わりの時を定められている。』

それは、宇宙の命でさえ例外ではない。

宇宙の命を永らえさせるために他の命を奪い、費やすことは残虐である』

装着された巨剣で、白い生物をまとめて切り潰す。

『我らは円環の理に則る者。』

歪んだ円環を破壊する者。

破壊、絶望、捕食。食物連鎖は絶望を前提とした歪んだ円環である。契約、希望、絶望。魔法少女と魔女による連鎖関係も、歪んだ円環である』

インキュベーターなる生物を残酷だと罵りながら、残酷にそれらを殺戮する巨竜は、目を覆いたくなるほどに矛盾の塊だった。

それは殺人鬼を残酷だと罵倒しながら、躊躇いなく殺人鬼を刺し殺すような攻撃過程。

『私は全てを破壊する』

暴走する正義。この竜を形容するならば、その言葉こそが相応しい。

白く小さな生き物達は、海に沈んでいく無数の同族達の死体を見送りながら、口々にその巨竜の名を呼んだ。

「あれは」

「あれの名は」

「シビルジャツジメンター、『■■■■■■■■』……!」

裁定者^{ジャツジメンター}はただひたすらに、インキュベーターに裁きを下し続けていた。

鹿目まどかは迷っていた。

バマミという魔法少女と出会った。

美樹さやかは魔法少女の契約を終えた。

迷いは、”契約して二人と同じになるか”というその一つのみ。

迷う必要なんてない、と心は言っている。

迷う理由なんてどこにもない、と理性は言っている。

誰かの助けになる自分になりたい、魂が言っている。

なのに何故迷うのか。

夢の中でその理由を見た気がするのに、その夢の内容を思い出せない

い。

暁美ほむらという転校生が来てから、まどかは自分のもののように自分のものでないような『何か』に悩まされている。

どこかで何かを見たような、見たことがないような、そんな不思議な感覚。

それが、まどかの契約に二の足を踏ませているのだ。

既視感のようで、記憶のようで、夢のような『何か』。

暁美ほむらとの出会いから始まった『それ』は、その日出会った大きな機械の竜との出会いが、終わらせた。

「うわっ、なに、これ……」

まどかとさやかか、それを見上げる。

それは大通りから少し離れた場所に鎮座する巨竜だった。

座った状態でも50m、立てば60mはありそうだ。

なのに道行く人達は誰もその巨竜に気付かない。

視界に入っても気にしない。

いや……視線が通る位置に居るのに視界に入っていない。

それはキュウベえと同類の存在である、ということの証明だ。

この竜は魔法少女、あるいは魔法少女の資質を持つ者にしか見えていない。

その時点で特別だ。

その時点で特異だ。

街中に巨竜が在っても何も思われないということは、街中で魔女が人を殺しても何も思われないことに等しい。

怪物が、世界と社会の隙間で蠢いている。

まどかとさやかはその巨竜を見た瞬間、初めて魔女の存在を知った時と同じ衝撃を受けていた。

「まどか、あんまり近寄らない方がいいよ」

「う、うん。ママさんまだかな……これだけ大きいと、見えてないわけがないと思うんだけど」

足元から巨竜を見上げて二人は思う。

城のようだ、と。

下から見上げれば城と見紛うてしまうほどに、その巨竜は大きく、独特の威圧感を持っている。

二人は頼れる先輩の到着を待っていたが、先輩を待つ一分一秒が、途方もなく長く感じられてしまう。

すると、巨竜が何か魔法陣を出した。

魔法陣は周囲の何かを調べ、次いで巨竜は光を放つ。

放たれた光がさやかとまどかを包み、光は二人の存在を根底から『理解』すると同時に、竜の”世界を守る”という意志を二人へと伝えていた。

「さやかちゃん、今の」

「うん。このロボット(?)、魔法少女みたいなの魔法陣出してたわ……」

正確には独特のフォーマットに改竄された、『鹿目まどかという魔法少女の魔法陣』である。

だがそれを見たことのある魔法少女はこの世に一人しか居ないために、その一人以外の魔法少女が見たところで、機械竜の魔法陣は『魔法少女の魔法陣』にしか見えない。

その一人が現れた。

ギヤラクトロンを見上げ、風に黒髪を揺らして、どこか懐かしそうに目を細めている。

子供の頃に壊してしまった玩具を見る大人の目は、子供の頃に別れた友人を見る大人の目は、こうなのだろうと思わせる……そんな目をしてる彼女の名は、暁美ほむら。

『ギヤラクトロン』

「! ほむらちゃん!」

「……転校生」

「この竜の名はギヤラクトロン。」

自称でもないし正式名称でもないけれど、まどかがそう呼べば応えるわ」

ほむらに促され、まどかは恐る恐るその名を呼んだ。

「ぎゃ……ギヤラクトロン、さん?」

腰を下ろしていたギヤラクトロンの瞳に、赤い光が宿る。

ギャラクトロンは立ち上がり、まどかを直視して、膝を折った。

『お久しぶりです、まどか様』

「へ?」

『何も奪わなくとも良い円環。』

希望に始まり絶望に終わる構図を否定する円環。

宇宙とは、他の命を食い物にしなくていいものであると、我々は証
明し続ける』

「あ、あの……私達、どこかで会ったことあるかな?」

『はい』

”どこかで会ったことがあるか”という問いに、”どこで会ったか
”の詳細を語ることなく、はいかいいえで答える。

その答えはいかにも機械的で、非人間的だった。

まどかの問いを理解し流暢に答えているはずなのに、まどかの問い
の意図を全く理解していないのは明白だった。

「夢の中でも、会ったんじゃないかしら」

ほむらが長い黒髪をかき上げて、どうでも良さそうに言い切る。

「まどか、ギャラクトロンに命じなさい」

「命じる……? ほむらちゃん、どういうこと?」

「こいつは放っておくと大惨事を引き起こす。」

『人を傷付けないこと』

『人を守ること』

『人の味方で在ること』

くらはいは命じておきなさい。あとは、そうね……

『インターフェースの人間に自由意志を残すように』

くらはいは命じておいたほうがいいかもしれないわ。執行が、始まる
前に」

「ええと……? ギャラクトロンさん。

人を傷付けないで、人を守って、人の味方でいて下さい。

いんたーふえーす……? の人にも、自由意志を残すようお願いし
ます」

『分かりました』

ギヤラクトロンはそう言い、腕を垂らすようにして降ろした。瞬間、さやかとまどかの背中に悪寒が走る。

ぶわっと肌が粟立つ。

まるで気付かない内に喉元にナイフが添えられていて、それが今降ろされて、降ろされた後にその刃の存在に気が付いたような、そんな感覚。

ギヤラクトロンを前にして、少女の生物的本能が安堵の息を吐いていた。

今、まどかがほむらの言う通りの言葉を発しなければ、数分後には街は廃墟になっていたかもしれない。

それは、ほむら以外の誰にも知り得ぬ話であったが。

「ほむらちゃん、これでどうなるの?」

「どうもならないように釘を刺したのよ」

いつものことだ。

暁美ほむらが訳知り顔で語るのも、肝心なことを何一つ話さず、表面的なことを断片的に話すだけに終わるのも、いつものことだ。

だから、いつものようにさやかの癩に障る。

「あんたこのロボットの知り合い? なんてそんなこと知ってるの?」

「私にその質問に答える義務があるのかしら」

「……アンタ、いちいち癩に障る言い方しかできないの?」

癩に障る言い方しかできないのではなく、ほむらはさやかを気遣う気が全く無いというだけなのだが、言動の結果だけを見れば同じことか。

あわあわしているまどかをギヤラクトロンが見つめ、そのギヤラクトロンを見上げ、ほむらは口を開く。

「戦友よ。一度だけ一緒に戦ったことがあるだけの」

「ふーん……戦友、ねえ」

ほむらは詳細まで話す気がまるで見て取れず、さやかもあからさまにほむらの言動を信用する気がなかった。

さやかもギヤラクトロンの方に視線を移すが、その瞬間ギヤラクト

ロンの胸部が開き、そこから赤い何かが転がり落ちてきた。

「あ、何か出て来た」

なんだろう、と思ったのもつかの間。

転がり落ちてきた赤色が、赤色混じりの人間——魔法少女——だということに気付き、まどかとさやかは血相を変える。

転がり落ちて来た魔法少女は、髪も服も真っ赤なくせに、顔だけは真っ青だった。

「吐きそう」

「えっ、えっ!？」

「ちよっと大丈夫!？」

(あら、今回は通訳に捕まっていたの、佐倉杏子だったのね……)

初対面の魔法少女に、まどかとさやかが駆け寄りその背中をさする。

赤い魔法少女は今にも吐きそうで、ほむらはそんな少女達を見下ろしている。

「前の時は、聞きそびれたけど」

ほむらはギャラクトロンの足元で、その足に触れながら細く呟く。

「あなたは一体、どこの宇宙のまどかに恩を感じてここに来たのかしら」

傍から見れば、どこの時間から来たのかも分からない少女からの問い。

どこの宇宙から来たのかも分からない、機械竜へと向けられた問い。

まどかを見つめるギャラクトロンは、何も答えなかった。

本当の気持ちと向き合え。でなければ死ね

朝早く、まだ太陽もその姿の全てを見せていない時間帯。

暁美ほむらは右手にバケツ、左手にモップを持っていた。

ギャラクトロンが起動し、光によるスキヤニングを行い、ほむらを『理解』する。

ほむらの目的を理解したギャラクトロンは、そのままその場所で動かない。

その不動を、ほむらは「掃除することを受け入れた」のだと解釈した。

「……約束だったわね。

『この戦いが終わったら、その薄汚れた体を私が掃除してあげる』って」

この世界でない世界。この時間でない時間。ここでないどこか。

このギャラクトロンでないギャラクトロンとした約束を、ほむらは果たそうとする。

水掃除をする時、難点となることはなんだろうか？

そう、低い場所で汲んだ水バケツを高い場所に運ぶことである。

これが案外辛いのだ。

水は運ぶ途中で溢れるし、運ぶのが辛い割に運べる量は多くない。

だがほむらは、魔法で格納すれば重い物も軽々運んでいける。

そういう意味では、暁美ほむらは見滝原で最も掃除に向いた魔法少女であると言えた。

「私が洗うまでもなく、今のあなたは綺麗だったみたいだけど」

額に汗して、不慣れな手つきでせっせと機体を洗う。

不器用で、上手いやり方を知らないが、約束を頼りに懸命に続ける。

根気強く続ける。その掃除のやり方は、暁美ほむらの人生そのものだった。

「ギャラクトロン。

あなた、本当に厄介だけど……

まどかが生きている内は、本当に頼りになるのよね」

鹿目まどかが、生きている内は。

ギヤラクトロンは人類を裁定するためにここに在る。

鹿目まどかが居るからこそ、ほむらにもよく分かっていない謎の理由で裁定が中断されているだけで、まどかが居なくなれば裁定は再開される。

死亡でも。

魔女化でもだ。

ほむらはその目でちゃんと見ている。

”まどかが居なくなつた後”、地球の文明をリセットし始めたギヤラクトロンの暴虐を、今でもはつきりと覚えている。

ただ、ほむらからすればどうでもいいのだ。

まどかが居なくなつた後の地球がギヤラクトロンに滅ぼされようが、どうでもいい。

ほむらは大前提として、まどかが失われた時点で時間を逆行するのだから。

ギヤラクトロンは人類文明において最悪の来訪者である。

だが、ほむらからすれば絶対に敵には回らない、まどかの味方で在り続ける、最高の味方だ。

その行動原理上、ギヤラクトロンはほむらの活動期間の間——まどかが健在の間——まどかだけの絶対的な味方として機能する。

ギヤラクトロンは心をこじらせない。

ギヤラクトロンはまどかを魔法少女に誘導しない。

ギヤラクトロンはインキュベーターを敵視する。

ギヤラクトロンは魔女にならない。

ギヤラクトロンは負けない。

ギヤラクトロンは、まどかを何がなんでも守ろうとする。

しからば、人類にとっては最悪で、ほむらにとっては最高であることはまず間違いない。

「ギヤラクトロン。あなたの中のまどかの評価に差異は無いのかしら」

一通り洗い終わって、ほむらはギヤラクトロンにワックスを塗り始

めた。

ちよつと花の匂いがするやつである。

「まどかの心は輝く球オーブのよう。

とことん丸く、ぶつかつても他人を傷付けない。

光り輝き、透き通っていて……叩かれれば、容易に碎ける。

円まどかの心という表現がよく似合う、と前のあなたは言っていたけれど

……」

何かを言いかけ、ほむらは人の気配を感じて言葉を止める。

「おはよう、暁美さん。意外な一面が見れたわね」

「おはよう、ほむらちゃん」

「……あんた何やってんの？」

朝、学校に行く前にギャラクトロンにワックスがけしているほむらを見て、マミとまどかとさやかは何を思ったのだろうか。

マミの言動からは、以前に感じられた言葉の棘が減っている。

まどかの声色はなんだか生暖かい。

さやかの発言には露骨にバカにした響きがあつた。

「転校生、あんたこいつと仲良いみたいだけど……何隠してんのさ？」

このロボットはなんでまどかの言うことだけ聞いてんの？

あんたの言うことは聞かないけど、あんたはこのロボに好意的みただけだ」

「あなたが知る必要のないことよ」

「……ちよつとー！」

無愛想に何も応えず、その場を去ろうとするほむら。

その肩を強引に掴み止めるさやか。

ほむらが不快そうに顔を顰め、さやかは苛立ちを隠さず、二人の間に一触即発の空気が流れ——二人の間に割って入ったマミが、微笑んだ。

「喧嘩はよくないわ。そうでしょうっ？」

「っ」

「……」

マミは私人としてのみ付き合っていると、いい人過ぎて信頼でき

て、いい人過ぎて騙されないか心配になってくるタイプ。

戦闘者としてのみ付き合っていると、最初は可愛らしきもある美人に見えるが、次第に女子中学生の皮を被った呂布に見えてくるタイプ。

呂布とは違って裏切らないし心優しいのが唯一の救いか。

ともかく、マミが間に入ればほむらも迂闊な行動には出られない。

呂布を与し易い相手と思う者などいない。

呂布は手を尽くしても勝てないから呂布なのだ。

マミに仲裁されれば、さやかもあまり大きくは出られない。

ほむらもまた、さやかとマミの両方に目で訴えられ、まどかに無言の”聞きたい”圧力をかけられては、黙りこくっているわけにもいかなかった。

「私が何でも知ってるだなんて思わないで頂戴。私が知っているのは……

ギヤラクトロンが他の宇宙で、他の宇宙のまどかとか何かの約束をしたということくらいよ」

「約束？ ロボットが人と約束して、人を守ってるっていうの？」

「ギヤラクトロンは交わした約束を忘れていないだけよ。

交わした約束を忘れず、たった一つの大切なことを胸に刻む。

人間でも、機械でも……

同じものを見て同じ想いを抱いたなら、その胸の内を理解できないことはないわ」

さやかはほむらが気に食わない。

冷めた目つきで、淡々とした口調で、執着のない諦めた声色で語る、本心を見せないほむらが気に食わない。

だが、今一瞬ほむらの言葉に熱が宿ったように思えた。

本心が垣間見えたように思えたのだ。

ほんの少しだけ、さやかのほむらを見る目が変わった。

相も変わらず、いけ好かないやつだと思われてはいたが。

「ギヤラクトロン……さん？ くん？ も、おはよう」

まどかがギヤラクトロンにも声をかけた。

誰よりも先んじて、柔らかに微笑んで朝の挨拶を告げる。

なんとまあ現金なことに、まどかが話しかけた途端、超高速でギャラクトロンは反応した。

”まどかの声かけに返答する”、ただそれだけのために、昼まで寝ようと思つてぐーすかしていた杏子をどこからか引っこ抜いてきて、会話用インターフェースとして利用する。

コードが杏子をぐるぐる巻きにして、コードの一本が耳から頭の中に入り、杏子の『声』をギャラクトロンが利用できる状態となった。
「な、なんだなんだなんだ!?!」

『おはようございませす、まどか様』

揺り起こされた杏子が、ボーカロイドの如くその声を利用される。胸部に格納された杏子・杏子を格納したギャラクトロンが同じ声で喋るために、意識して聞き分けないと二人の声は聞き分けられない。

コードを鬱陶しげに振り解こうとする杏子と、ギャラクトロンの足元から見上げるママの目が合った。

「……佐倉さん」

「んだよママ、その目は」

ママの視線は悲しみ混じりの、申し訳無さそうな視線。

杏子の視線は後悔混じりの、拒絶感を滲ませた視線。

一歩踏み出し、歩み寄ろうとする意志を見せたママに対し、杏子はママから逃げるようにその顔を逸らした。

二人の間には、かつて共闘し最終的に喧嘩別れした者達特有の気不足味がある。

「馴れ合うつもりはねーぞ。あたしも強引に連れて来られて迷惑してるんだ」

「……」

「あたしらはとつとくに袂を分かつてんだ。

また鬱陶しく近寄って来たらあたしも容赦しねえ。

あんたもあたしも基本的にウマが合わねえんだ、そうだろ?」

杏子がぶつきらぼうに言つて、ママが少し傷付いた顔を見せた。

二人の会話は、同じ過去を共有するこの二人以外の誰も割つて入

ることを許されないもの。

人の心があれば、ここに割って入ろうとは思わないだろう。

『虚偽である』

「あ?」

『個体・佐倉杏子の本心と言動はかけ離れている。直結再生開始――』

人の心が、あればだが。

『ウマが合わないとは言ったけど、嫌いじゃない。』

気に入らないとは言ったけど、憎んでなんかない。

ああ、あたしはまた余計なこと言っちゃまった、くそっ』

「!? おいコラてめえ黙れ!」

『あたしの自業自得だったのは分かっている。』

ああ、でも、あの頃のこと謝りたかったんだ。

謝りたかったのに、何喧嘩売ってんだ、あたしは……』

「黙れつつってんだろ!」

ギャラクトロンは杏子の声で、杏子の頭の中をストレートに垂れ流す。

やがて垂れ流すのをやめ、ギャラクトロンは自分の言葉を語りだした。

『人はすぐそうして争いの種を撒く。』

真実を語らず嘘偽を語る。

和解の機会を遠ざけ、争いを望む。

この星の生態系は残虐であり、争いを生む虚言はそれ以上に醜悪で……』

「うるせええええええええええっ!!」

ギャラクトロンは許さない。

命と命の争いを、その残虐な行為を許さない。

無意味な争いを、心のすれ違いを原因とする争いを許さない。

食物連鎖という攻撃行為さえ許さないギャラクトロンが、精神的なものを理由とする敵対関係を許すだろうか? 許すわけがない。

争いを止めるのがギャラクトロンの存在意義であるからして、彼が

この状況で優先する行為はマミと杏子の抹殺だ。

それで二人の争いはなくなる。

だがそれはまどかに禁止されているために、杏子の嘘を暴いたというわけだ。

マミは照れたような、困ったような、それでいて少し嬉しそうな苦笑を浮かべ、頬を搔いて杏子に呼びかける。

「……少し、長くなるようなお話がしたいわ。佐倉さん、久しぶりに茶会をしない？」

「うるせえ誰が行くか！」

『本当は行きたい——』

「黙ってろてめえ！ このっ、このっ、コード外れねっ……！」

杏子は全身、特に頭に絡みつくコードを外そうとするが外れない。魔法少女に変身しても、頑丈なコードは切れる気配すら見せない。

強引に外しても大丈夫そうだというのは感覚で分かっているのだが、コードがとにかく頑丈で、絡みつくそれが取れないのだ。

けれども、外せなければ頭の中身が垂れ流される生き恥が続いてしまうわけで。

杏子が哀れでいてもたってもいられなくなったさやかが、コードを解くのに手を貸し始めた。

「ちよつとちよつと、暴れたら更に絡むでしょうが。」

杏子って言ったっけ？ ちよつと待って、あたしが解いてみるから」

「お、おう、サンキュー」

『いいやつだなこいつ』

「あたしの頭の中を勝手に喋んじやねえぞこのクソロボ！」

そんなギャラクトロンと杏子とさやかを、まどかとほむらが見つめている。

まどかはギャラクトロンの行為をいいことと見ればいいのか、悪いことと見ればいいのか判断がつかず迷っていて、ほむらの視線には殺意すら宿っていた。

殺意がある。あるのだが……ほむらはギャラクトロンのその行為

を間違っていると言うことはない。

ギヤラクトロンのその行為が、結果オーライの和解を招くことを知っていたからだ。

「ほむらちゃん、ギヤラクトロンさんって……」

「あいつはああいう奴よ。人の心が無いの」

ほむらの頭の中に、嫌な思い出がじんわり蘇る。

ギヤラクトロンに暴露された記憶が、その後なんやかんやで仲間が出来た記憶が蘇る。

あのコードは『この時間ではないかつての昔』、ほむらの頭にも繋がっていて、ほむらの頭の中身を仲間垂れ流したこともあったから。

こんな絶対おかしいわ

魔女の結界に、ギヤラクトロンがビームをぶち込む。

結界に引きこもる魔女を臆病なチキン野郎、結界をオープンと例えるならば、見事なチキンの丸焼きが完成した。

魔女の肉が程よく保護膜の代わりになったのか、結界の中からホクホクに暖められたグリーンフシードが排出される。

「おい、あたしの声普段貸してやってんだろ。それも使用料によこせ」
『君には前回の討伐分を渡した。』

これはまどか様の方である。

度が過ぎた強欲はただの悪徳であり、許されることではない』

「あーへいへい」

杏子の主張を押し込んで、ギヤラクトロンはさやか横で佇んでいるまどかの前に跪き、まどかへとグリーンフシードを捧げる。

『どうぞ』

「あ、ありがとう……私まだ魔法少女じゃないから、使わないんだけどな」

「いいじゃん、貰つときだよ。まどかがあたしらに手渡して使えばいいだけの話でしょ」

さやかの勧めで、まどかは大人しくグリーンフシードを受け取った。

ギヤラクトロンの出現以来、見滝原の魔法少女の労働環境は劇的に改善した。

ギヤラクトロンが強すぎるから？ いや、それだけではない。

ママさやかまどかの三人組に、ほむら杏子という外様二人が協力する関係が、ややぎこちないながらも成立したからだ。

杏子とママ、ほむらとさやかの間には、まだ反発する感情があるものの、先日まであったはずの敵意はない。

このぎこちない和解をもたらしたのが、”自分と違う考えの者は皆殺しにすべし”という思考が基本のギヤラクトロンなのだというのだから、世も末だ。

「大体な、居心地悪いんだよここ。もっと居心地良くなんねえの？」

『する必要が無い』

「てんめー……」

「あの、ギャラクترونさん？」

『敬称は不要です』

「ギャラクترونくんも……その、できれば、杏子ちゃんのお願いを聞いてあげて欲しいな」

『了解しました』

杏子が腰掛けていた座席もどきが、急にふんわり柔らかくなった。「この対応の差、釈然としねー……まどか、だったっけ？ サンキュ」
「ずっとそこに座りっぱなしって、ちよつと辛いかなって、前から思ってたから」

杏子が感謝してニツと笑えば、まどかが照れ臭そうに頬を掻く。

優しい子だ、掛け値なしに。

杏子とまどかの会話は、どことなく強気な姉と優しい妹のような関係性を思わせる。

「ギャラクترونの声担当は大変だねえ」

さやかは杏子に同情しつつ、手に持っていたサンドイッチを頬張った。

それを見たギャラクترونが、杏子の声でそれを咎める。

『食物連鎖は残虐である』

「いいじゃんこんくらい。」

あたしら、機械のあんたと違って何か食べてないと死んじゃうんだよ……」

さやかの発言は的を射ている。

ギャラクترونの食物連鎖批判は、”何も食わずに生きていける”機械のギャラクترونだからこそ言えることでもあるからだ。

「あのね、さやかちゃん」

「ん？ どしたのさまどか」

「私ね、ギャラクترونくんが言うことも、ちよつとだけ分かる気がするの」

「……んん？ そう？」

「昔、パパがお魚さんの絵本を読んでもくれた時に言ってたんだ。

食べられる側も、食べられてしまうことは痛いことなんだって。

食べることは罪深いことだけど、誰もがそうしていけないと生きていけないんだって。

でも、『仕方がないことじゃないか』と正当化しちゃいけないことなんだって。

『仕方がないこと』と『していいこと』は一緒じゃない。

いつだってそれを忘れないようにしないと、人はどんどん残酷になっただけになってしまうんだって」

「まどかん家はパパもママもすっぱーな……」

あたしはそれ聞いても、まどかは気にしすぎだって思うけど」

『違う』

”食べられることの残酷”がピンとこないさやかに、ギヤラクトロンの刺すような言葉が向けられる。

『誰も死にたくはない。』

誰も殺されたくはないのだ。

誰も犠牲になどなりたくはない。他の誰かの延命のための犠牲になどなりたくはない』

「そりやそうだ、あたしだってそういうのは嫌だと思うし」

『だからこそ、自己犠牲は尊い。』

他者のための自己犠牲は美德である。

されど、望んで自己犠牲を行う命は本来存在しない。家畜も自己犠牲など選びはしない』

ギヤラクトロンの視線が、一瞬だけまどかの方を向いた。

『君達が普段食べている野生の動物も、家畜も、犠牲を拒絶している。人に訴える、人の心に届く言葉を持たないだけだ。』

”助かりたい”と思おうとも、その祈りが聞き届けられることはない』

「……やなこと言うなあ」

『今この星で、祈りを奇跡に変える権利は人間だけが持っている。』

家畜に神が居たならば……信者の祈りと痛みを聞き、人を滅ぼして

いただろう。

その家畜ですら、食物として他の命を食らっている。この世界の醜悪さは、見るに堪えない』

QBであれば、こう言うだろう。

家畜は人間に保護されたからこそここまで繁栄できたんだよ？

ギヤラクトロンであれば、それにこう返すだろう。

食い物にされる個体の苦しみを度外視する時点で、論外である。

そして互いにこう言い切るはずだ。

——話にならない、何故そんな考え方ができるんだ？

ギヤラクトロンの言い草は、人類もインキュベーターもまとめて非難している。

『そこには無意識の傲慢がある。』

”魚や牛よりも人間の方が生きるべきだ”という傲慢が』

『人間は自分より生きる価値のあるものを食べた、という罪悪感を
持っているか。』

いや、持つてはいない。

食物連鎖の罪悪感は、人間以外の命を人間より下に見ることで自然と軽減される』

人間心理は、喋ったり人格がある動物を食べることに抵抗を感じ、喋らず単純な思考を持つ動物を食べることはあまり抵抗を感じないように出てきている。

それは、食べられてしまう動物にも多少は感情移入する仕組みが、人間の心には備わっているからなのだそうです。

教育の一環で、先程まで生きていた豚を解体する過程を子供に見せるといふものがあるが、子供にはこれで吐いてしまう者も居るとい
う。

家畜も人もまんべんなく殺す連続殺人犯が、「人も家畜も同じ命じゃないか」と言えば、まともな人間は「家畜と人は違うだろう！」と
言うだろう。

それが、まともな人間であるということなのだ。

『それが例え、宇宙を生かすためであつても、他の命を喰らう連鎖は許されない』

「宇宙って……まーた話のスケールが急にでっかくなつたわね」

『食物連鎖に正義はない。』

人間は全て、この星の残酷な自然界を模倣していた。

生誕したその瞬間から、自分より弱い者を食らい続けることを宿命付けられている。

なればこそ、それは悪である。

だからこそ、食物連鎖という歪んだ進化を内包する生態系は、滅ぼさなければならぬ』

「でも、滅ぼさないんでしょ？」

『それがまどか様のご命令である。だが、許されるものではない』

”死にたくない”という食われる者の気持ち語りながら、食う者も食われる者も一緒に皆殺しにしようとするギヤラクトロンの主張は、激しく矛盾している。

ある意味では、殺人の罪深さを語りつつも、殺人の罪を犯した罪人を処刑する死刑執行人に近いものがあつた。

殺人を否定しながら、殺人によって罪を裁く処刑人。

食物連鎖による殺害を否定しながら、文明単位の殺害を実行する虐殺者。

ギヤラクトロンは悪なのかと言えば、それは違うと言えるだろう。

この機械竜は暴走する正義。

下手な悪よりよっぽど悪質な、生命の在り方そのものを否定する正義の暴力だ。

この機械竜の問題の本質は、間違っているなら殺していいと、地球の全生命に対し思考する、ギヤラクトロンのこのスタンスにあつた。

「あー、ダメだ。あたしは一足先に退散するよ、まどか」

「さやかちゃんは今日もお見舞い？」

「お見舞いってどうか、付き添い？」

恭介の手は治ったけど、経過観察とかで病院に行くことになつたらしいから」

まどかは帰宅し、杏子はまどかからグリーンフシードを貰って上機嫌で帰り、さやかか病院へと向かうと、ギャラクトロンはその場にぽんと残された。

美樹さやかは癒しの祈りで魔法少女へと成った。

彼女が捧げた願いは、幼馴染の手を治すこと。

医者からすれば、完治した後も時々病院に来て精密検査して欲しいというのは分かるが、その手が何の問題も無くなったことはさやかが一番よく知っている。

「ありがとう、さやか。今日も検査に付き合ってくれて」

「いいってことよ、さやかちゃんも暇だったからねー」

暇というのは、嘘でもあるし本当でもある。

時間を作って、恭介のために暇な時間を用意した、というのが正しい。

「本当に奇跡だよ。治らないって言われた手が治るなんて」

「日頃の行いが良かったんじゃない？」

「あはは、まさか。それなら僕より奇跡が起こるべき人がいっぱいいるはずだよ」

「おお、日頃の行いがいいさやかちゃんにも素晴らしい奇跡が起こるとか!？」

「もう、さやかはいつもそんなだよね」

奇跡とは本来偶然を指すものだが、魔法少女の奇跡は必然だ。

起こるわけがない奇跡を、魔法少女は祈りをもって形にする。

さやかは戦いの運命を背負わされたが、元気に動いている恭介の目を見るたびに、自分が形にした奇跡の価値を噛み締め、思わず笑顔になつてしまう。

——今この星で、祈りを奇跡に変える権利は人間だけが持っている。

——家畜に神が居たならば……信者の祈りと痛みを聞き、人を滅ぼしていただろう。

奇跡の価値を噛み締めるたび、ギャラクトロンの言葉が蘇る。
ギャラクトロンの言っていることが分からないさやかではない。
その言い分の全てが完全に間違っているとも思っていない。

(でもな、なんか違う、って思うんだよな……)

ただ、元を辿ればさやかの好意も、憧れも、その祈りの源泉も、恭介の音楽に辿り着く。

幼き頃に聞いた恭介少年の音楽は、さやかの心を惹きつけてやまなかつたあの音楽は、間違いなく『誰からも奪わず、他人に与えるだけのもの』だった。

あの音楽は人が生み出したもの。

あの音楽は、ギャラクトロンも否定しないはずだと、さやかは確信している。

だからさやかは思うのだ。

ギャラクトロンが言うほど、人間や地球の命は間違ったものじゃないはずだ、と。

「さやか、あれ」

「ん？」

恭介が指差し、さやかがそちらを見ると、口喧嘩している子供が二人。

この病院に親が連れて来たのだろうか、親の姿は見えなかった。

「止めた方がいいかな」

「待って、もしかしたら自分達で仲直りできる程度の喧嘩かもしれないし、様子見よ」

「ああ……確かに、それならその方がいいかもね」

子供同士の喧嘩なら、子供だけでカタがつくのが一番だろう。

「さやか、改めてこの前はごめん」

「え？ どうしたのさ、急に」

「手が治らないって言われて、自暴自棄になって、酷いこと言っ……
本当にごめん」

「ああ、それ？」

いいっていいって、気にしないで。

あたしも今恭介に言われるまで忘れてたくらいだから！」
「……ありがとう」

嘘だ。

さやかはその時に恭介に言われた言葉に追い詰められ、覚悟を決め、自分と彼の間を横たわっていた『現実』という名の悲劇を打ち払うべく、魔法少女の奇跡を求めた。

忘れたことなどない。

忘れられるわけがない。

それこそが、魔法少女としてのさやかの原点オリジンであるからして。

「？ これは……」

子供達の口喧嘩を見守っていた恭介が、顔を上げた。

どこからか音楽が聞こえてくる。

恭介が辺りを見回すも、その音楽の弾き手は見つからない。

音楽は子供達に向けられていて、子供達はやがて口喧嘩をやめ、自分達に向けられる音楽に聞き入っていた。

「音楽……？ それも、とても素敵な、心穏やかになるような……」

子供達が口喧嘩をやめると、同時に音楽も止まった。

今の音楽が喧嘩を止めるために奏でられたことは明白で、恭介は音楽の出来とその意図に感銘を受けつつ、目を閉じ静かに今の音楽を噛み締めていた。

さやかはぼかんと口を開け、明後日の方向を凝視している。

病院の傍で、棒立ちで音楽を流しているギヤラクトロンが、さやかにはしつかり見えていた。

「ギヤラクトロン!?!」

ギヤラクトロンの姿はキュウベえ同様、さやかにしか見えない。

ゆえにさやかの驚きの声が、恭介を振り向かせてしまった。

「さやか、この音楽の奏者を知っているのかい？」

今僕は音楽に聞き入っていて君の声がよく聞こえてなくて……

今言ったのは曲名？ 奏者の人の名前？ さやかの知り合いだったら、紹介して欲しいな」

「え、えーっと、県外の学校に通ってる、あたしの最近出来た友達の女

の子だよ」

「女の子……さやかとの友達になれる歳……同年代に、これだけの音楽家が居たなんて……」

「きよ、恭介？」

「同じ曲と一緒に……いやダメだ、鈍った僕の今の腕じゃ……」

リハビリ……まずは腕を見せても恥じないレベルにまで勘を取り戻さないと……」

「恭介やーい」

上条恭介はホモではない。

さやかを女の子として見てはいるし、女の子として意識する可能性もゼロではない。

なのに彼とさやかがくつつかないのは、彼が音楽だけを見ているからだ。

他の誰よりも、きっと自分よりも、音楽が好きだからだ。

ゆえにこそ、彼の気を引きたければ最善策はただ一つ。

とてつもなく素晴らしい音楽を、聞かせればいい。

「さやか。僕、今の音楽を奏でていた子に恋をしてみましたかもしれない」

「——えっ」

地球のものとは思えないほどに素晴らしく、優しい、争いを止めるためだけの音楽は、恭介の心にストレートに刺さったようだ。

音楽は、宇宙共通のコミュニケーションツールである。

センスの有る人間なら、言葉が通じなくともその音楽から『平和を望む』意志を読み取れる。

天才音楽少年上条恭介は、その音楽から見事にその意志を読み取っていた。

恭介の頭が色惚ける。

さやかの頭がショートする。

今この瞬間より、ギャラクトロンはさやかの最強最大の恋敵となった。

「応援してくれるよね。」

僕の腕が以前の通り……いや、以前以上のものになったら、その子を紹介して欲しいんだ」

「え、っ……あっ……うん」

「腕が治ってすぐに目標ができるなんて、僕は幸運なのかもしれない」
さやかは明後日の方向を見る。

そこには、さやかにしか見えないギヤラクトロンが居た。

ギヤラクトロンは、興味なさげにさやかと恭介をじつと見ている。
顔は竜。

全身はロボット。

手には武器。

胸には比較的巨乳なはずのさやかを超える、胸囲40mは超えてい
そうなバスト。

くびれたウエスト。

ウルトラマンも殺す後頭部のポニーテールに隠されたヒップ。

あたしはこれに負けたのか、と思った瞬間、さやかの手からカバン
が落ちた。

美樹さんってほんとバカ

さやかはどうしたものと迷っていた。

既に時刻は夜。ギャラクトロンに何か言っただろうと思っただけで横まで連れて来たのだが、特に思いつかない。

ギャラクトロンの巨体であれば、ここからでも帰宅後のまどかとその家を見守ることはできるようで、まどかの家の方角をじっと見ている。

(ユーウツだ……)

さやかは苦悩する。

ギャラクトロンの説明をすれば恭介は納得するか？

いや、ギャラクトロンは謎魔法陣で姿を隠している。実際にその姿を見せなければ恭介は納得しないだろう。

……音楽があればいい、と割り切られてしまったらどうしよう、という想いも少しある。

ともかく、現状どうにもならなかった。

さやかの中に沸き起こるのは嫉妬心。

恭介の心を射止めたギャラクトロンへの嫉妬心だ。

が、ギャラクトロンと恭介が結ばれるということはないはずだ、という想いもあって、ギャラクトロンに嫉妬しつつも「恭介が取られちゃう」という想いは発生していない。

問題点は、恭介がギャラクトロンの音楽に強烈に惚れているという一点に収束する。

恭介が誰よりも太くて固くて大きい(抽象的表現)ギャラクトロンでしか満足できない体になっちゃったか否かは、神のみぞ知るといったところか。

「あんた、争いを止めに来たんだっけ？」

『肯定する』

「恋が理由の争いも止めたりする？」

『無論』

「人類から争いはなくならないよねえ……」

はあ、とさやかは溜め息を吐く。

その溜め息はままならない現実ゆえのものか、こんなロボ野郎にも恋愛的に嫉妬してしまう自分の心のままならさゆえのものか。

『この文明から争いがなくならないのは、この星の残酷な生態系を模倣しているからだ』

「ふーん、人間が邪悪だから、とかじゃないんだ」

『本来、邪悪な命など存在しない。』

ただし、進化の途中で間違ってしまうことはある』

『食物連鎖やつてる地球がそれだって、あんたは主張するわけだ』

『地球の生態系は残虐である。』

宇宙は他生物から何かを奪わずともいけるようにデザインされている』

「間違ったらやり直せばいいんじゃないの？」

『進化はやり直せない』

「退化すればいいじゃん？ ライチユウからピカチュウに戻すようなもんでしょ」

さやかは絶妙なアホさ漂う発言に、ギャラクトロンは一瞬だけ絶句した。

『退化も進化の一種だ。』

必要なものを残し、不要なものを削ぎ落とし、新たな何かを自らに備える。

それが進化である。飛ぶ必要がない世界であるならば、羽を退化させるのは進化なのだ』

「あ、なるほど」

なら、恋愛感情も人間に必要なものだから残ったんだろうか、とさやかは思った。

『食物連鎖も『進化』の一種。』

進化自体は、間違った現象などではない。

だが地球の生態系は間違った……人間が言うところの、ガラパゴス的進化ではない』

「ちよつと待って、検索する」

ガラパゴスってなによ、とさやかが携帯電話で検索を始める。
ギヤラクトロンは彼女の検索終了を座って待つことにした。

「ガラパゴス……狭い島という閉鎖環境で生物が好き勝手に進化……
へー……珍生物がいっぱい……あ、この鳥かわいい……」

周囲と隔絶された狭い環境で、特異な進化を遂げたもの……なーる
ほど……」

『もうよいか』

「あ、うん、もういいよ。で、それなんか問題あんの？」

ギヤラクトロン、起立。

その瞳はさやかの首後ろ辺りをこつそり飛んでいた蚊を捉える。

”人を傷付けるな”というまどかからのコマンドを守りつつ、ギヤラクトロンは出力を絞ったビームを発射した。

ビームはさやかの髪をかすめ、さやかの背後で蚊を爆散させた。

「ひゃっ!？」

『他の命から何かを奪い、生き永らえることは醜悪である』

「……あ、あー、うん。で、地球の命は皆殺したいってわけね」

『そうだ』

ギヤラクトロンの行動原理を再認識し、さやかはふとあることに気付いた。

最近の見滝原——特にこの周辺の地域——では、ゴミ捨て場を荒らす野良犬・野良猫・カラスなどの増加が問題になっていた。

小学生の子が野良犬に襲われたということもあって、近所の小学校では集団下校や大人付き添いの登下校などが徹底されている。

野良犬と野良猫は捕まえられては保健所に送られ、処分されているという話を聞き、まどかが少し悲しそうな顔をしていたことを、さやかはよく覚えている。

前は少し道を歩くだけで野良犬や野良猫、カラスを見た。

それらの生物が道にフンをしたりして、道も随分汚くなっていた。

なのに、最近それらの姿を全く見ていない。

空を飛ぶカラスも、ゴミ袋を食い荒らして道を汚す野良猫も、子供に吠え掛かり噛みつきに行く野良犬も。

最近の街で、ただの一匹も見えていない。
少しばかり、さやかは背筋がゾツとした。

「……うーん」

普段のさやかなら、ここで引き下がっていただろう。

だが、今日のさやかは違う。

今日のさやかは寝取られさやか。

惚れた男を他の誰かに取られ、攻撃性がちよつと増したさやかちゃんだ。

惚れた男を奪っていった寝取りドラゴンに、一矢報いたいという気持ちがあった。

「人間が進化してったら、どっかで食物連鎖とか卒業したりするんじゃない?」

もしかしたらそういう未来もあるんじゃないかなって思う。あんな、答えを急ぎ過ぎだよ」

” 答えを急ぎ過ぎ” という言葉は、さやかがいつだか誰かに言われた言葉だ。まだかか、まだかの母か、親友の仁美か、クラス担任の早乙女先生か。

さやかは誰に言われたかも忘れてしまったその言葉を、自分の言葉として口にした。

『そんな未来はない。』

この星の命にそんな可能性はない。できるわけがない』
「やってみなくちゃわかんなくない?」

『不可能だ』

「いや、やってみなくちゃわかんないね!

ネバー・セイ・ネバー! できないなんて言わないで!」

よし、決まった、とさやかは得意気に思った。

『美樹さやかは上条恭介と生殖活動を行えるか』

「で、でででできるわけないでしょ!」

『できないと言うのか』

「うぐっ」

『耳が痛いか。だから君達は耳を塞ぐ。都合の悪いことは無視しよう

とする』

「くうっ」

『ゆえに、醜悪だ』

ぎやふんと言わされてしまった。

さやかは反論できないが、何かないか、何かないかと考える。

GALACTRON^{ギャラクトロ}などという、名前にNTRの文字列が含まれる機械竜にさやかが負けたまま、してやられたままなど哀れ過ぎる。

さやかは考えに考え、そして一つ思いついた。

「そうだ！」

あなたの大好きなまどか様居るじゃん？

そのまどか様は今も食物連鎖の中にいるわけだけど、その辺の矛盾はどう消化してんの？」

ギャラクトロンは答えない。

そのままの姿勢で硬直し、ピコーンピコーンと音を鳴らして何かを考え始めた。

返答に窮しているというのが誰の目にも明らかである。

「勝った……！」

さやかは満足して寝始めた。

今日はいい気分です寝れそうだと、思いつて寝床に入った様子。

それから数時間の時が流れた。

やがて誰もが寝静まった、深夜二時頃。

ギャラクトロンはさやかの家をぶん殴ろうとするが、まどかの言葉を思い出し思い留まる。

そしてさやかの耳の穴にコードを一本突っ込んで、大音量の音楽を流し、叩き起こした。

「ふぎやあああああ!？」

『解答の構成を完了した』

「何事!?! 何事!?!」

『まどか様は因果を超越し、はるか古代にまで時を遡る干渉を行っている。』

それは地球に食物連鎖が誕生する以前のこと。

それは過去現在未来から自分の所業による罪業を消し去る行為。時系列を考えれば、地球に食物連鎖が発生したのはまどか様の干渉より後である』

「夜中に叩き起こした拳句意味わかんない理屈並べんのやめろー！」
寝ぼけた頭がギヤラクトロンの理屈のほとんどを聞き流しつつも、ギヤラクトロンが何か理屈を捏ねてまどかを正当化しようとしていることだけは、さやかにも理解できた。

嫌な時間に目が冴えてしまったさやか。

ギヤラクトロンを怒ろうとするが、今ギヤラクトロンに起こされるまで悪夢を見ていたこと、ギヤラクトロンのお陰で悪夢が途切れたことを思い出し、口ごもってしまう。

「……はぁ」

嫌な夢だった。

恭介に告白したのにフラれ、恭介が別の女の子とくつついてしまう夢だ。

しかも夢の途中から、恭介の恋人になった女の子の顔がギヤラクトロンになっていた。

ガチのガチな悪夢である。

「あんたみたいに、あたしにも鉄の体と鋼の心があればまた別だったのかな」

戦う動機と、恭介の手を治した動機と、自分が望んでいるものは別だと思っていたはずなのに。

見返りが欲しくて願ったわけではないと、思っていたはずなのに。恭介が自分以外の誰かに惚れたというだけで——恭介が自分に好意を持っていないと理解しただけで——さやかの戦意は揺らいでしまう。

さやかは綺麗な想いだけで立っていられなくなってしまった。

「守りたいものがこの街にあるから、戦ってたつもりだったのに……魔法少女になって、願いを叶えた後は世の中の平和守るつもりだっ

たのに……

その守りたいものの一つが揺らいただけで、あたしはこんなにも迷うんだね……」

「マミさんみたいにはなれないや、とさやかは隠しきれない悔しさを誤魔化すように笑った。

ギヤラクトロンは少し思案し、さやかに手を差し伸べる。

『騎乗を推奨する』

「乗れってこと？ 何よ一体」

『飛翔する』

「え？ うわっ!？」

さやかを手の上に乗せ——ドデカイ鉤爪しかないと魔法陣で固定——、ギヤラクトロンは日本の夜空へと飛び上がった。

その飛翔速度は、現在地球に存在するあらゆる飛行機械の速度を遥かに凌駕する。

「ちよ、ちよつと！ 何すんのさいきなり！」

『下を見よ』

「下？」

いつの間にか空の色は夜から昼のものへと変わっており、パジャマ姿のさやかが下を見下ろしてみれば、そこには世界の残虐があった。

偉い人の私利私欲を満たすためだけの紛争で、死んでいく民衆が居た。

利権が欲しくて、民族間で殺し合う者達が居た。

二人の男が、互いの家族を互いに殺した復讐者となっていた。

飢饉で食料がなく、痩せ細った子供が死にそうになっていた。

死にそうになっているその子供の横で、餓死済みの子供が鳥にその肉を食われていた。

無数の悲劇があり、無数の戦乱があり、その中のいくつかには、悲劇を止めようとする魔法少女の姿もあった。

ギヤラクトロンはさやかがそれらを目にできるように様々な工夫を施していたが、高速で各所の上空を通り過ぎていくがゆえに、さやかはそれらの戦いに介入する暇も貰えない。

助けないと、止めないと、と思つても、思つた瞬間にはそこを通り過ぎていく。

さやかがテレビで時々見る、”恵まれない子供達のために募金を”というCMの『恵まれない子供達』が、今は彼女の目で直接見えるところにあつた。

『魔法少女が守っているものなど多くはない。』

全ての争いを止めたいのならば、全てを破壊しなくてはならない』
「争いを止めるには……全部殺すしか、ないって言うの!?!」

『そうだ』

「そんなことない！ 絶対に！」

ギャラクトロンは争いを止めるのが第一で、さやかは何かを守るのが第一だ。

守ろうとするものはさよかの恋心であつたり、誰かが胸に秘めた想いであつたり、人が平和な日常を過ごす権利であつたり……もつと単純に、罪なき人の命だつたりする。

さやかは守るためなら争いを躊躇わず、ギャラクトロンは争いを止めるためなら破壊も殺害も躊躇わない。

地球の残酷さを見下ろしながらも、二人の想いは真逆だつた。

『美樹さやかは、自己評価が低く、理想が高い。』

それが争いを引き起こしやすい性格の原因である。改めることを推奨する』

「んなっ」

『”世界”は、”世の中”は、君が頑張れば守りきれほど小さくはない』

「――」

『願えば叶う、努力すれば全てが手に入る、それは人間の傲慢である』
それらの悲劇は、地球上にありふれている”当たり前”だ。

一時であつても消し去るならば、奇跡が要る。

全てを消し去るのであれば、神域の奇跡か全ての消滅が必要になつてくる。

そしてさやかは、自分の魂を差し出しての一度きりの奇跡を、恋し

た幼馴染のために使い切ってしまった者だった。

ギャラクトロンの言葉は、罵倒のようで、真理のようで、暴論のようで、忠告のようで。

「ちよっ……ああもう！一回降ろして一回！」

ギャラクトロンの訴えかけて、さやかはとりあえず一回降ろしてもらう。

一度地に足付けて考えたかったのだろうか。

ギャラクトロンの森の木々を踏み倒しながら着陸し、さやかを地面に降ろす。

「あたしだって、世界で起きてる悲劇くらい知ってるっての……

ったくもう、宇宙から来たロボットが人間にお説教とか世も末……ん？」

恭介のこと、ギャラクトロンに見せられたもの、それらのことでもちやごちやと考えていたさやかの思考が晴れる。

何かが解決したからではない。

ただ、その場所から見える景色が、とても美しかったからだ。

「あれ、こころサルカじゃん」

『肯定する。現在位置はルサルカと呼称される場所だ』

「知ってる？」

恭介が好きな昔の音楽家、ナターシャ・ロマノワの出身地がここなんだよ。

画集でこの風景見たことあるんだよね……わあ、いい景色だわあ。

ナターシャはここで生まれて、後に日本に来て、昔名盤をいくつも残したんだよね」

ルサルカは、名音楽家ナターシャを排出した音楽の聖地だ。

ルサルカという地名の由来は、若くして死んだ花嫁や水難事故で死んだ少女が幽霊のように水辺を漂うようになった怪異・水の精霊ルサルカに由来する。

水の魔法少女であるさやかには、少し感じ入るものがあるのかもしれない。

『興味はない』

「えー、ホントに？ 知らない？ こういうのなんだけど。らー、らららーらーららー……」

さやかが曲を口ずさむ。

えー、こんな有名な曲なのに知らないのー？ とギャラクトロンを少しからかうつもりだったさやかは、ギャラクトロンの予想外の行動に驚く。

さやかが口ずさんでいた曲のメロディを、ギャラクトロンが奏で始めたのだ。

「！」

ギャラクトロンは既に地球上のスキヤニングを完了している。

地球の多くをギャラクトロンは既に理解しており、その上でとんでもない暴論を展開するからこそ、この機械竜はシビルジャツジメンター足りうるのだ。

さやかが口ずさんでいた歌を、ギャラクトロンは既に知っている。

竜と少女のセッションが始まった。

「♪」

水の精霊の名を戴いた地で、水の魔法少女が歌う。

機械が奏で、人は歌う。

一人と一機が音楽を創り、大気が震える。

さよかの歌唱力はお世辞にも高くはない。

音楽の才能があったなら、さやかはCDを買ってくるだけでなく、恭介と同じ世界に生きる努力くらいはしていたはずだ。

さよかの内にある絶望の一部は、さやかに音楽の才能がなく、さやかには恭介と同じ世界を見ることが出来ないという現実からも生まれている。

さやかに、音楽の才能はない。

だが、今ここにあるさやかとギャラクトロンの音楽は、言葉の通じない別宇宙の生物にすら、音楽の良さというものを伝えて余りあるものだった。

（ああ、そうだよね 音楽で心は動く……動かされる。

あたしは……あたしのこの気持ちの出発点は……きつと、そこで

……)

さやかは初心を思い出す。

何故、恭介を好きになったか。

何故、恭介に音楽を取り戻して欲しいと切望したか。

その想いの源泉を、幼少期に上条恭介の演奏に覚えた感動を、思い出と共に思い出す。

歌って、歌って、歌って。

ギヤラクトロンの曲に、腹から出した声を合わせて。

「……ふう」

一曲歌いきったなら、なんだか満足してしまった。

「あー……結果的にだけど、イライラした後カラオケ行っただけな感じになったね」

『歌えば発散できるストレスを、他生物への攻撃で発散するのが地球生物の悪——』

「あーはいはいわかったから！ 日本帰ろ帰ろ！」

ここまで来た時にあつた気持ちだが、日本へ帰る道程では不思議と綺麗さっぱり消えていた。

さやかの心は晴れ晴れとしている。

まるで、自分の中にあつた『争いの原因となる気持ち』を片っ端からギヤラクトロンの虐殺されてしまったかのように。

「あ、ギヤラクトロン、そこで一回降ろして」

自宅に帰る前に、と、さやかはコンビニの前で降ろしてもらおう。

そしてコンビニに入り、パジャマのポケットに入れたままだった財布を開いて、財布の中身を全て『人道的支援募金』と書かれた箱の中にぶち込んだ。

『焼け石に水と言って良い行為だ』

「いいじゃん、やらないよかマシでしょ？」

まあ明日のあたしは小遣いがなくなっただけ、って後悔するかもしれないけど……

今日のあたしはそうしたかった。だからいいんだ、これでいいの。知らない？ ナターシャの明言。『握った手の中、愛が生まれる』だ

よ」

『握ったのは金だ』

「愛だよ愛！ あたしの愛さ！ 人助けしようっていう、ちよつとした気持ち！」

中学生なんて、千円ですら大金だというのに、さやかは財布の全額を募金してみせた。

「さ、帰ろう。んで頑張ろう！」

今日も明日も明後日も！

きつと色々、なんとかなると信じよう！」

『安易な期待に大半の要素を期待する作戦は、その大半が失敗に終わるものだ』

「ネバー・セイ・ネバー！ やってみなくちゃ、わかんないさ！」

あはは、とさやかは笑う。

そこには何の憂いも無さそうだ。

彼女が抱えた問題は何も解決してはいない。

変化があつたのは問題そのものではなく、さよかの心の方だ。

問題や悩みを抱えても笑える程度の成長。ちよつとばかりの、けれ

ども確かな成長だった。

「ん？ 何この音……」

ギヤラクトロンの内側から、何かを叩く音がする。

さやかが首を傾げると、ギヤラクトロンの胸部が開く。

そこには、暁美ほむらが居た。

「えっ」

ギヤラクトロンの淡々とした口調は、時に声の聞き分けを難しくさせる。

佐倉杏子や暁美ほむらと言った、さやかとの付き合いが一ヶ月以下の者達の声なら、尚更に。

「……んん、えふっ、いい言葉じゃない。ネバー・セイ・ネバー」

「うわああああああああっ!!」

さよかの色恋話からずつと聞いていたほむらが、ちよつとばかり笑いを堪えながら言う。

さやかは変身し、全力でギャラクトロンの足を蹴り飛ばした。

唐突に現れた道しるべ

暁美ほむらは、夜を駆ける。

彼女は一定期間を幾度となくループする時間遡行者であるが、そのせいで『確実に特定の魔法少女を殺す魔女』の存在を意識せざるを得ない。

魔法少女の死は、まどかの契約、ひいてはまどかの死に直結する。危険な魔女の出現時期と出現場所を覚えておいて、深夜でも構わず狩るのがほむらのすべきことのひとつだ。

「最近、魔女もキュウベえも見ないわね」

夜を駆けるほむらが、遙か高所から街を見下ろし、水平方向にある機械竜の横顔を見る。

ギヤラクトロンはまどか達が学校に行っている間も、彼女らが眠っている深夜にも、止まらず活動を続けている。

機械に眠りは必要ない。疲労さえも存在しない。

深夜の夜景に、焼き潰されるキュウベえや魔女達が溶けていく。

ギヤラクトロンは、まどかに人を傷付けることを禁止されている。

魔法少女は人間判定を受けている。

魔女は人間判定を受けていない。

インキュベーターは最優先抹殺対象の一つに登録されている。

それゆえの、限定的殺戮だった。

「助かるわ。私より感度の良い探知能力で、休憩も睡眠も取らず行動してくれるのは」

ギヤラクトロンは魔力の消費も無いので、グリーンシールドを無駄遣いするということもない。

そして厄介な魔女に苦戦することもない。

倒した魔女のグリーンシールドは、巡り巡って見滝原の魔法少女へと返される。

結果、魔女の犠牲者は最低限に、魔法少女の手元のグリーンシールド数は最大限になっていく。

ほむらも最近魔法少女対策に夜更かしするということもなく、久しぶ

りにぐっすりと眠れる夜が多くなってきていた。

「ワルプルギスは前の時と同じく、ギヤラクトロンが倒してくれるとして……」

……私がすべきことは、ギヤラクトロンが倒せない敵の対策。つまり

”人間”、と呟いたほむらの声が、闇夜の静寂に響き広がっていた。

放課後、鹿目まどかは一人でギヤラクトロンの前に居た。

ギヤラクトロンがなんやかんや魔法少女達の仲間として認められてから、何日かが経っている。

無力なまどかが一人でギヤラクトロンの前に居ても誰も止めようとはしない程度には、ギヤラクトロンも信用されるようになった様子。

まどかは膝の上に本を広げ、本の上で花と草を編んだ冠を作っていた。

「あれ、おかしいな……これこんな感じだったっけ……」

クラスの友人に貰った女性向け雑誌を読んでいたまどかだが、雑誌の巻末コーナーに花の冠の作り方が載っていたのを見て、久しぶりに作ってみる気になったようだ。

まどかにも、幼い頃にこの手の冠を作った覚えはある。

久しぶりにやってみよう、くらいの気持ちであった。

……なのだが、妙に試行錯誤になってしまった。

冠を作った記憶はあるのに、作った手順はうろ覚え。

”こうだったはず”という形でしか覚えていなくて、それがなんだか悔しく感じてしまう。

鹿目まどかは、過去のことを正しく覚えていられる人を尊敬する。

時間が経てば、何かの繰り返しで時間が流れれば、人の記憶はどんな”こうだったはず”というものになっていってしまう。

”約束を忘れない”というだけのことですら、貫けるのならいつか

偉業の域に至る。

まどかは自分なりに過去のことを思い出しながら、花冠を編んでいった。

「よし、出来た！」

まどかは編んだ花冠を、ギヤラクトロンの爪の先に添える。

滑稽なくらいに小さくて、次の瞬間には散ってしまいそうなほどに儂くて、微笑ましくなるほどに可愛い。

全身全てが他の命を殺すためにあるギヤラクトロンの、製造以来初めて、殺傷を目的としない部分が装着された。

「ど、どうかな？」

ギヤラクトロンの中に、今格納されている人間は居ない。ゆえに喋れない。

竜は頷く。

そして、それだけで感謝の意を伝えられていないと感じたのか、音楽を使ってまどかへと感謝の意を伝え始めた。

嬉しそうにまどかが笑う。

捧げた花の冠以上に、可愛い笑顔だった。

「よかった、喜んでもらえたみたいで。

いつも皆を守ってくれてありがとう。

さやかちゃんと言ってたよ。ギヤラクトロンくんのお陰で助かってるって」

人は、自分の主観でしか真実を見ることができない。

ほむら以外の魔法少女達は、キュウベえをまだ味方だと思ってる。

最近キュウベえを見ていない理由が、ギヤラクトロンが皆殺しにしているからだということにも気付いてはいない。

ギヤラクトロンの本質を分かったつもりでいる。

ただ、間違いなく甘く見ている。

ギヤラクトロンが魔法少女システムを残酷と否定している理由も正しく理解していない。

魔法少女達に課せられた残酷に、魔法少女達が気付いていない中、

ギャラクトロンはその残酷に怒りをもって応えていた。

まどかの感謝は無知で、無垢だ。

けれども確かな価値があり、その感謝には暖かさがあつた。

キユウベえに「助けてくれてありがとう」と言うに等しい愚かさで、ギャラクトロンに純粹な好意を向けるまどかの姿を、ギャラクトロンは静かに見下ろしている。

「ん？ まどかじゃん」

「あ、杏子ちゃん」

「あんたが一人で居るなんて、珍しいこともあるもんだ」

「あはは……本当は、さやかちゃんも一緒に行く予定だったんだけどね」

「ん？ 予定？」

「杏子ちゃんは『未来ブログ』って知ってる？」

「いや、知らね」

ふらつと現れた杏子に、まどかは自分がここに一人で居る理由を説明し始めた。

「ちよつと前からね、中学校で有名なんだ。

そのこのブログで予言されたことは必ず当たるんだって。

でね、そのブログをやってるの、私達と同じ中学生の女の子なんだって！」

「へえー、占い師みたいなもんか」

「そんなものじゃないよ！ 本当に当たるって、皆噂してるの！」

それでね、そのブログに私がコメントしたら、そのブログの女の子と話が広がって……」

「ははーん、その先はあたしにも読めるぞ。

女の子だと思ったらオッサンだったんだろ？ 知ってる知ってる」

「違うよ!?! い、一応電話でお話もしたからね!?!」

「お前なんつーか、無防備と危なっかしさの塊みたいな奴だな……」

杏子から見れば、ママは正義感と責任感が強すぎるし、ほむらは秘密主義過ぎるし、さやかは理想が高すぎるし、まどかは純粹過ぎる。

それぞれにそれぞれの危なっかしさがあつたが、まどかは無力な

分、その危なっかしさが倍増しになって見えた。

「で、聞いたらね。」

同じ中学生の女の子の悩みを聞いてあげてたりするんだって。

私は知らなかったけど、面倒見がいいからそっちの方でも評判だったらしいんだ」

「世の中には暇人が居るもんだねえ」

「それで、私もお話してみたいなって思ったの。」

私の未来も見てくれるって言うてくれてて、さやかちゃんと一緒に
行こうとしたんだけど……」

「アイツは今日も報われない恋愛に人生を無駄遣いしてんだろ？」

「杏子ちゃん！ 言い方！」

彼女からすれば他人のために悩み相談室やってる奴も、他人のせいで恋愛お悩み中の奴も、等しくあんまり共感できない者達だった。
「それで、私はその人に会いに行こうとして、その途中でギャラクトロくんくと会ったの。」

まだ会う約束の時間まで一時間くらいあったから、ここで時間を潰そうかなって」

「成程ねえ。それさ、あたしも付いてっていいかい？」

「え？」

「予言者なんて大体インチキ野郎だったのが相場だろ？」

そいつの化けの皮を剥がしてみてえ。

あんたを一人で妙な相手に会わせるってのも、ちと怖いしな」

「私、そんなに子供扱いされるほど、ダメな子に見えてたかな……」

「あんたが悪いんじゃないよ。ただ、世の中に悪い奴が多いってだけの話さ」

杏子はギャラクトロンの足を肘で小突き、スレた笑みを浮かべる。

「で、これから会う奴の名前知ってんの？」

「うん。その人の名前は——」

「美国織莉子です。貴女が鹿目まどかさんですね？」

出会った瞬間、まどかと杏子は対照的な思考をした。

綺麗な人だなあ、とまどかは思った。

こいつ強い、と杏子は思った。

まどかは初対面の人の良い所を探す少女で、杏子はまず第一に強さを測る少女だったから。

「鹿目まどかです。会えて嬉しいです」

「佐倉杏子だ。ただの付き添いだから、あたしのことは気にせず話進めてくれよ」

「では、まどかさんと杏子さんとお呼びしますね」

うふふ、と織莉子が微笑む。

微笑む姿すら上品で、いかにもお嬢様といった所作だ。

柔らかな織莉子の笑顔が、織莉子のお茶会に招かれたまどかと杏子の警戒心を和らげる。

そんな織莉子の額に、遠距離からほむらがスナイパーライフルの照準を合わせていた。

（妙な動きをしたら撃つ。妙な動きをしなくても……嫌な予感がしたら撃つ）

過去のループで、美国織莉子は鹿目まどかを殺したことがある。ほむらからすれば、警戒せずにはいられない危険人物だった。

まどかにトラウマを刻むことになろうとも、怪しい動きをしたならば即座に美国織莉子をミンチ織莉子に変える覚悟で、ほむらは引き金に指をかけた。

「織莉子さんの予知ブログ、いつも楽しみにしています！」

「ふふ、ごめんなさいね。」

あれ、ちよつとしたズルなの。

現在の流れを調整するために始めたことなのだけれど……ほら、これ」

「！ ソウルジェム！ ……そうか、納得だ。あんたもあたしらと同

じ……」

「織莉子さんが魔法少女!? あ、予知って……魔法の!？」

美国織莉子は魔法少女だ。

捧げた祈りは、『未来を知る』という方向性を持った願い。

彼女は未来予知に特化した魔法少女であり、そのためか現在の何かを犠牲にしても、遠い未来の特大的悲劇を回避しようとする傾向がある。

ならば。

織莉子がまどかをここに呼び、話をしようとした行為そのものが、未来に起こる何らかの悲劇を回避するためにある、ということである。

「地平線の向こうから、全てを引っくり返す嵐が。

空の向こうから、とても禍々しいものが来ます」

織莉子が未来を語り始めて、ほむらが引き金にかけた指の動きを止めた。

「嵐に、禍々しいもの……? 杏子ちゃん、何のことか分かる?」

「いんやきつぱりだ。空の向こう……ってことは、宇宙とかか?」

「近い未来、この二つは必ず到来します。それも、見滝原に」

え、とまどかは声を漏らし、杏子は静かに目の色を戦闘者のそれへと変えた。

「どういうことだ? あたしに分かるように言え」

「禍々しきものは夜を切り裂く嵐に巻き込まれ、嵐と混ざり、より禍々しく変わります」

「もうちよつと具体的に説明できねえのか?」

「私は自分が見た未来しか話せません。」

大きな闇と大きな光がぶつかり……そして、物語は終わる。そのくらいしか」

「あたしにも分かんねえが、あんたにも詳しい経緯は分かんねえってことか」

「はっ」

織莉子の表情の深刻さからも、彼女が見たものの恐ろしさが分か

る。

魔法少女がこんな顔をするなど、尋常な事態ではない。

「禍々しく悪しきもの、降り出で戯曲と共に過ぎ去りぬ……」

織莉子は歌うように、未来に訪れる脅威の存在を語り。

「私はその悪しきものに、名前をつけました」

筆で書道用紙に書き上げたその名前を、ドンとテーブルの上に広げた。

『「禍悪降戯過」と』

「は？」

「え？」

田舎の中二病ヤンキーが付けたようなネーミングに、思わず杏子とまどかから素っ頓狂な声が漏れる。

「あの……これ、なんて読むんですか？」

「マガワルブルギス禍悪降戯過です。」

あの日見た、未来の世界を蹂躪する悪に相応しい名は、これしかないかと

「お前ブログとかばっかやってないで外出ろよ。センス腐ってんぞ」
「!？」

織莉子は自分が何かするでもなく、未来に見た絶望の中身を語り、それでいて見滝原の援軍に行く気も見せず。

ほむらは「そんなもの、知らない」と呟いて。

マガワルブルギス禍悪降戯過が近い未来に見滝原に来ることだけが、まどか達に告げ

られていた。

そんなの、ギャラクトロンが許さない

佐倉杏子は夢を見ていた。

昔の夢。家族の希望を祈り、家族の絶望に終わった過去の夢だ。

杏子は父のための願いを叶え、それが父を終わらせてしまったことを胸に刻み、それを最大の教訓として生きている。

奇跡はタダではない。

奇跡が生んだ希望は絶望を呼び、そうして差し引きをゼロにして世の中は回っている。

佐倉杏子は、そう信じていた。

世の中には良いことも悪いこともあり、最後には帳尻が合っていない。

良いことだけが起ることもなく、悪いことだけが起ることもない。

それは当たり前のこと。

摂理は必然の理であり、それは人間だけでなく——インキュベーターにも適用される。

この宇宙に生きるのであれば、どんな命でも、災害や通り魔のような予測不可能の不幸に見舞われる可能性はあるものだ。

「……んっ」

佐倉杏子は目を覚ます。

新しい寝床を探すのが面倒臭くなって、ギャラクトロンの中で寝たことを思い出しながら、目をこすり、機内のモニターで外を見ようとして……杏子は、燃える宇宙を見る。

ギャラクトロンは、燃える宇宙の只中に居た。

「はっ」

宇宙は燃えない。

ならば、そこで燃えているものはなんなのか。

星が燃えていた。

星の外の被造物が燃えていた。

インキュベーターが燃えていた。

宇宙空間を埋め尽くす勢いで、そこかしこでインキュベーターが燃えていた。

「な、ん……だ、これっ……」

『インキュベーターの母星、生息範囲、関与星系のリセットを完了した』

『地球に残った一部の個体のリセットを完了させれば、インキュベーターのリセットは完了する』

一瞬、杏子はギャラクトロンの言葉を理解できなかつた。つまり、ここは、インキュベーターの故郷。

ギャラクトロンはインキュベーターの主張の一切を無視し、魔法少女の利害を尽く無視し、人類全体の損得さえ無視し、この虐殺を実行したということだ。

自分の中で寝ている杏子のことさえ気にせず、キュウベえのほぼ全てを殺し尽くした。

その上で……止まらない。

『続き、他星系の食物連鎖を行う生態系をリセットする』

「っ！ やめろ！ 止まれ！ これ以上殺すんじゃない！」

この宇宙に存在する他の生命——まどかに殺すなど言われた『人間』以外の全て——を殺そうとするギャラクトロンを、杏子が止める。

その言葉に従い、ギャラクトロンは動きを止めた。

——ギャラクトロンくんも……その、できれば、杏子ちゃんのお願いを聞いてあげて欲しいな

あの時まどかがギャラクトロンに言い聞かせた命令コマンドが、まだ効力を発揮しているのだろう。

どの程度まで有効かは分からないが、今のギャラクトロンは杏子の願いを聞いてくれている。

本当に、鹿目まどかと交わした約束を忘れず行動しているようだ。ギャラクトロンは思考し、適応している。

まどかの言いつけを守りながら、自分のすべきことを実行しようとしている。

殺すための抜け道を、探している。

「もう人間以外の生き物も殺すなよ。」

まどかが食うもんが最終的になくなっちまうぞ？

あと、もう地球から出んな。

お前が地球を離れてるのが短時間でも、その短時間でまどかの奴が殺られるかもだろ？」

杏子の言葉に、ギャラクトロンは悩む。

悩んで、悩んで、ピコーンピコーンと音を鳴らして。

ソウルジエムを握り”万が一”に備える杏子の期待通りに、頷いた。

『了解した』

杏子がほつと息を吐くと、ギャラクトロンは魔法陣を展開する。

次元を跳躍する術式が応用された、空間を跳躍する魔法術式だ。

杏子は宇宙に浮かぶ、既に星ですらなくなったインキュベーター達の故郷を見やる。

彼女が昔読んだ本には、星の死の例として、超新星爆発やブラックホール化等のものが記載されていた。

それが、星の寿命の果てにあるものなのだと書かれていた。

宇宙もいつか死んでしまうと、そこには書かれていた気もする。

だが、違った。

インキュベーター達が住まう星は、そういった”星の死”とはまるで違う終焉を迎えていた。

彼らの星は、寿命で死んだのではなく、ギャラクトロンに殺害されたからだ。

殺害された星の死体は、超新星やブラックホール以上に無残な死に様を晒している。

砕けた星の大地は星の肉。

ビームで完全に蒸発させられ、宇宙空間で結合した水分は星の血。

灰と炭になったキュウベえは、無残に破壊された星の欠片と混ざりあつて、どこからどこまでがキュウベえの死体なのかも分からない。

吐き気を催す光景を見ていた杏子だが、ギャラクトロンが魔法陣で

空間を跳躍すると、彼女が見ていた光景は一瞬で地球のものへと変わった。

「……便利なもん持ってんな。

戦闘で使ってねえのは相手が弱すぎるからか、事前動作に時間食いすぎるからか」

『当機は長距離移動を前提としたチューニングがされている』

「そうかい」

杏子はギヤラクトロンの胸部を開け、コードを解いて外に出るでもなく、座ったまま頭を抱えて沈黙する。

ギヤラクトロンの胸部内に保管された花の冠が、杏子の目に入った。

まどかが感謝の心と共に贈ったそれが、昨日と今日でまるで違うものに見えるのは、杏子がギヤラクトロンの見る目がガラリと変わってしまったからだろうか。

開いた胸部から見える街の夜景さえ、杏子に”この夜景もギヤラクトロンならすぐ壊せる”という嫌な連想をさせてしまう。

「おかえりなさい。やはり宇宙の方に行っていたようね」

「! 曉美ほむら……」

「聞かせてくれる? 何があったのか」

迎えてくれたほむらに、杏子は一部始終を話した。

ほむらは淡々とした反応を見せていたが、杏子が言葉に恐怖を滲ませているのに対し、ほむらは言葉に嬉しさを滲ませないよう必死に抑え込んでいるように見えた。

「……あたしは、こいつが怖い」

杏子がギヤラクトロンを見る目は、すっかり変わってしまった。た。

まどかが贈った花冠も、まどかの優しさが形になったものと見ていたのに、今ではまどかの見る目のなさが形になったものしか見えていない。

そのくらい、ギヤラクトロンへの印象がひっくり返ってしまった。た。

「でしようね。」

悪は憎めばいい。でも、暴走する正義は怖いでしよう?。」

「正義?。こいつが正義だつていうのか? 悪じゃねえのか?」

曲がりなりにもキュウベえに願いを叶えてもらった、あたしらが

「ええ、少なくとも私にとつてのギヤラクトロンは悪じゃないわ」

自分の話を聞いた上で、ほむらがギヤラクトロンの足に寄りかかるようにして背中を預けるのを見て、杏子はよく分からないものを見ている気分になった。

やがて、そこにキュウベえが現れる。

「地球人の善悪感覚は置いておくとして、定義としては悪に近いんじゃないかな」

「! キュウベえ! ……やめろギヤラクトロン!」

ギヤラクトロンが反応し動いたのを見て、杏子が慌てて止める。

ほむらはキュウベえを見て目を細めた。

「あ、あのさ……キュウベえ……あんたの仲間が……」

杏子は気を遣っている。

キュウベえを胡散臭い奴だと思っている杏子は、好きか嫌いかで言えば嫌い寄りの感情を抱いてはいるが、仲間が多く死んだキュウベえにはつい同情してしまう。

仲間の死を、故郷の滅亡を、どうキュウベえに伝えたものか。

杏子は悩み、言葉を選んで、口ごもってしまう。

それは彼女が普段心の奥に隠している、彼女本来の優しさだった。

だが、キュウベえは自分に優しさの感情が向けられていることさえ理解せず、語り出した。

「さっきの攻勢は恐ろしいものだったね。」

僕らの抵抗がまるで無意味だったよ。

予想以上に、ギヤラクトロンという存在は恐ろしいものだったよう
だ」

「……え?」

キュウベえは総体生物である。

一が全であり、全が一。

個体の知覚は、総体の知覚。

彼は星の上でギャラクトロンに抵抗し、応戦し、敗北した記憶をちゃんと持っている。

「これは僕らの手には負えない。

できれば、まどかがギャラクトロンの消滅を願って契約してくれれば良いのだけれど」

その一言が、二者の逆鱗に触れた。

ギャラクトロンの爪がキュウベえの横に突き立てられ、ほむらの銃口がキュウベえの額に突きつけられる。

「させないわ。まどかを魔法少女なんてものには、絶対にさせない」

「さて、それはどうかな」

「……？ 何を企んでいるの？」

「僕らもなりふり構ってられない。

今、他の僕がまどかとさやかとマミに、魔法少女の真実を伝えたところさ」

「――！」

ほむらが、手にした銃でキュウベえを思いっきり殴った。

「なんてことを！」

「このままだと僕らは宇宙を救済する前に全滅してしまう。

それだけは避けなければならない。

僕らの死滅は、宇宙の終焉をほとんど確定的にしてしまうからね。

だからこそ、僅かな可能性を見出すために、場を乱す手を打たなければならぬ」

不確定要素が増えれば勝敗はあやふやになり、不確定要素が減れば勝者と敗者はより確定的なものとなる。

場を乱して不確定要素を増やそうとするのは、大抵敗北が確定しかけている者だ。

もはや地球にしか個体が残っていないキュウベえは、ギャラクトロンという不確定要素を超える不確定要素を求めている。

「ギャラクトロンが僕らを全滅させるのは、ほぼ確定事項だろう。

だからこそ、僕らは全滅する前に、宇宙を救済していくことにした」

「……まどか一人契約させれば、帳尻は合うってわけね」

「その通り。彼女は素晴らしいよ。」

人間のようない方をすれば……彼女が、今の僕らの唯一の希望なんだろうね」

人類史上最高とも言える資質を持つまどかが魔法少女になりさえすれば、そのエネルギーで、キュウベエの目的である宇宙の熱的死の回避は成る。

キュウベエには、その後ならば自分達が絶滅してもいいとすら思っているフシがある。

彼らは残り少ない個体の全てを、まどか契約のために費やすつもりのようなのだ。

「私達が居る限り、あなたの思い通りにならないわ。絶対に」

ほむらはギャラクトロンに拳を叩きつけるようにして、”私達”と
言い放った。

鹿目まどかという中心点と、それを狙うインキュベーターと、まどかを守る守護者という構図が浮き彫りになる。

杏子は話の細かな部分が理解できなくて、けれど嫌な予感だけはして、キュウベエ達に真面目な顔で問いかける。

「なあ、魔法少女の真実ってなんだ？」

「僕らが告げる魔法少女の真実、それはね——」

キュウベエは語る。

無感情と微笑みの二種類しかない、いつもの顔で語る。

魔法少女とは何なのか。

魔法少女の末路とは何なのか。

インキュベーターの目的とは何なのか。

口調は淡々としているわけでもなく、むしろ陽気な少年のようですらあるのに、語られる内容に気遣いも情もまるでない。

インキュベーターが語った真実は、論理的には正しいと解釈できるものであったが、人情的には全く納得できないものだった。

「……は？」

杏子の目に殺意が宿り、杏子の手がキュウベエの首を掴み上げる。

「てめえ、ふざけんじやねえぞ！」

んなことしといて、てめえ、てめえ……なんでそんな平気なツラして語ってやがる!」

「僕はいつもこんな顔だよ。君も知っているだろう?」

「ざっけんな!」

杏子はようやく、ギャラクトロンがキュウベえを殺し尽くした理由を理解した。

「そのまま殺してしまってもいいわよ、杏子。

さつきそいつ自身が言ってたけど、そいつ自体は無数に居る。

けど、事ここに至っては一体でも数を減らすことは無駄じゃないわ」

「今日は知りたくもなかった話ばつかで、やんなるね」

「そいつはまどかを契約させたがっている。

だから美樹さやかとバママに真実を語ったのよ。

まどかの因果なら、契約の際にどんな願いも叶えられる。

魔法少女を人間に戻すことも、ギャラクトロンの打倒も、おそらく死者の蘇生ですら」

「……まどかを追い込むために、まどかの周囲から追い込もうとしてるってことか?」

「ええ、その通り。

やはりあなたが一番魔法少女に向いたメンタリテイを持っているわね。

追い込まれても絶望せず、冷静に思考を回し、ある程度情を廃してものを考えられる」

ほむらは褒めたつもりだったが、杏子は褒められた者の表情とはまた違う苦笑を浮かべる。

「まどかと話してるとき、思うんだよな。

あたしはそんないやつじゃないよって。

まどかの目は、あたしを実情以上にいいやつに見てる気がする」

「ええ、あの子はいい子だもの」

「で、お前と話してると思うんだ。

お前があたしを見る目を見ると思うんだ。

あたしはそんな悪いやつだったっけか、って」

「……」

「ま、あたしは実際まどかと違っていい子じゃねーけどさ」

杏子はほむらに対し抱いていた本音を口にして、ほむらの目を見る。

ほむらもまた、本音を——少しばかり冷たく酷な言い方にして——語った。

「当たり前じゃない。

まどかは少女としてのあなたを見ている。

私は魔法少女としてあなたを見ている。

まどかはあなたと私生活でも一緒に遊びたいと思っている。

でも私は、戦いの時以外で積極的にあなたと一緒に居たいだなんて思ったことはないもの」

今現在のほむらには、まどかしか見えていない。

まどかのためなら何もかもを犠牲にできるだけの覚悟が、そこにはある。

「はっ、酷薄な奴だなてめー」

ほむらの酷薄な言い方に、杏子は反発を覚えるでもなく、むしろ納得したようだ。

突き放した言い方だったはずなのに、ほむらと杏子の心が少し近付いた音がする。

「だけど、こいつよりはマシか」

杏子は、掴み上げていたキュウベえを思いつきり上に投げた。

「ギャラクトロン！

人間以外は殺すなってあれ、撤回する！

こいつはお前の大切なまどか様を害するよ、絶対に！」

『了解した』

チュイン、と細いビームが放たれて、投げ上げられたキュウベえがビームで燃え尽きた。

「ほむら、どうするっ？」

「手分けして美樹さやかとバمامミを探しましょう。

ソウルジェムが濁っていたら、取り押さえなくてもグリーンフシードで浄化して頂戴。

使った分のグリーンフシードは、後で私が自分の保有分から補填するわ」

「あたしがそんな意地汚く見えるか？ 要らねえよ、あたしの分から勝手に使うさ」

そして二人は駆け出していく。

杏子は「مامミは大丈夫だがさやかは絶対にヤバイ」と思考して。

ほむらは「バمامミも美樹さやかも絶対に危険」と思考して。

二人は仲間を救いに向かう。

ギャラクトロンも後を追ひ、ゆつたりと夜空の飛行を始めた。

もう何も怖くない

川に掛かる橋の上でマミを見つけて、ほむらは躊躇った。

ここからどう接触すべきか？ それを悩むのは、ほむらが潜在的な苦手意識をマミに対して持っていることが原因である。

ほむらはマミの性格に好意を持ち、その心の弱さと戦闘力の強さに苦手意識を持っていた。

ほむらは時間停止という最強の魔法を使ってなお、マミに勝てるとは思っていない。

いや、八割がた敗北すると思っていた。

「マミが」ほむらを傷付けないように取り押さえる”ことを第一に考えている状態でさえ、ほむらの勝率は恐らく三割を切る。

”ほむらを殺す”ことを第一に考えている状態なら、勝率は最悪0%だ。

ほむらには今のマミの精神状態がさっぱり読めない。

昔から「あんた空気読めないね」「いや相手の顔見て気持ち慮れよ」等々散々に言われてきた暁美ほむらだ。遠くから顔を見ただけで気持ちなんて読めるはずもない。

その上、戦闘者として最上級の才能とセンスを持つマミに対し、ほむらは本質的に戦闘者に向いた者ではない。

彼女が戦闘に役立てられる資質など、痩せ我慢と諦めない心くらいしか無かった。

「母」マミ」

マミに歩み寄り、声を掛けようとするほむら。

ほむらはマミの心情ばかり気にしていて、何故マミが橋の上という『二方向からしか来ることができない場所』に居たかを気にしなかった。

戦闘者としての才覚の差が、命運を分ける。

「！…これは……!?!」

ほむらが罨だと気付いた瞬間から、ほむらがリボンの罨に捕らえられるまでの一瞬は、魔法の発動すら叶わないほどの一瞬だった。

リボンに捕らわれたならもう遅い。

ほむらの時間停止の魔法では、マミのリボンを振り解くことは不可能である。

マミは音もなく、マスケットをほむらへ向けた。

「私ね、暁美さんの魔法が何なのかずつと考えていたの。」

あなたは私達と共闘はしても、魔法の種だけは明かしてくれなかったから。

考えて、考えて、考えて……

あなたの魔法がどんなものでも対応できるよう、全ての可能性を考慮したわ」

「それが、これってわけ。……ねえ、仲間の魔法少女を殺して平気なの？」

ほむらが口にしたのは、呪いのような言葉だった。

言葉が呪いのようにマミの心を蝕んで、マミの表情を泣きそうなものへと変える。

覚悟を決めたはずのほむらの心が、少し痛んだ。

「それがするべきことならば、私は仲間だって殺せるわ。殺してみせる」

普段のマミと、今のマミはまるで違った。

普段の戦いで戦意が浮かぶ瞳には、涙が浮かんでいる。

仲間を守るためではなく、仲間を殺すために銃を構えている。

胸には希望でなく、絶望。

人が壁を押せば、同じ量の力が反作用として返って来る。

この仕組みを、ある意味で最も分かりやすく体現しているのが魔法少女だ。

祈りは呪いに。希望は絶望に。光は闇へと堕ちる。

かつて”助かりたい”と願ったマミの末路には、”自分の生を否定する”という呪いが悪辣に飾られるようになっていた。

「何が正しいのかなんて、分からない。」

少なくとも……私がこれまで信じてきた正しさは……全部嘘で……

希望を振り撒く私達は……いつかそれ以上の絶望を撒き散らす運命でっ……！」

マミは冷静に物事を見ていて、錯乱した頭でそれらを解釈していた。

さやかを、ほむらを、杏子を、そして自分を殺さなければ、とマミは思考する。

殺さなければ、いつか皆魔女になって罪のない人を殺し始める。

殺さなければ、いつか皆望まずして人殺しの魔女になってしまう。

罪のない人を守り、仲間達の尊厳を守るためには、皆が魔法少女で居る内に殺すしかない。

ゆえに、マミは泣きながらも仲間を殺す。

インキュベーターが『どういう伝え方』をしたのか、ほむらはマミの錯乱具合から察し、噛みちぎらんばかりに唇を噛んでいた。

「暁美さんは、全部知っていたのね」

「ええ。その上で思うわ。いずれ魔女になるからといって、今仲間を殺す必要はないって」

「いいえ、私達は絶望を振りまく前に、誰かに迷惑をかける前に、終わらなければならぬの」

マミの行為は、守る行為だ。

罪なき人を、仲間の尊厳を、自分の心を守る行為だ。

その結果、罪なき人を守る魔法少女は居なくなり、仲間も自分も殺すことになり、自分の心をズタズタに引き裂くはめになろうとも、マミは止まらない。

マミは暴走しつつも冷静な判断力を備えており、仲間が魔女になった後のことも、大体想像することができていた。

「特に、あなたはね」

「……」

「時間を止める魔女なんて、もしかしたら、誰にも止められないかもしれないもの」

マミの魔力が高まり、ほむらがもがく。

だが無駄な抵抗だ。

ほむらの力で、そのリボンは千切れない。

「恨んでくれて構わない。

いえ、恨んで。

私を絶対に許さないで。

この最悪を誰からも責められなかったら……それこそ私、どうにか
なっつてしまえそう」

銃ではなく、大砲がほむらに向けられた瞬間、ほむらは死を覚悟し
た。

「ティロ・ファイナーレッツ！」

ほむらの脳裏に、堅牢な防御を固めた魔女がこの一撃で粉碎された
記憶が蘇る。

ほむらの肌を、大威力砲撃が生み出した気流が撫でる。

ほむらの心境が、ゾウに踏み潰されるアリのそれと似たようなもの
になる。

されどその砲撃は、横から差し込まれた巨大剣にて防がれた。

「——!?!」

巨大剣そのまま、ほむらを捕らえていたリボンを切り裂く。

針の穴を通すような精密な剣筋は、ほむらに傷一つ付けずリボンだ
けを切り裂いた。

ほむらは誰にも見えない角度でふつと笑い、自分を助けてくれた
『それ』の胸部に飛び込んで、自分の安全を確保しつつ彼に自分の声を
貸す。

「……前にもこんな形で、助けられたことあったわね」

『そんな事実は存在しない』

「あら、じゃあ前世辺りで助けてもらっていたのかも」

『人生に次はない』

「人生に次がある人間だって居るわよ。あなたが知らないだけで」

同じ人生を幾度となく繰り返している彼女らしい、”前の世界”を
略して『前世』と言い換える分かり辛いジョーク。

誰にも理解されないジョークなどに価値はないが、彼女はそれなりに
満足した顔をしていた。

『『あなたのやり方』だと最悪ママに武器の一つくらいは壊されるわ。少し、手を貸してあげる』

川に足を沈め、水しぶきと共に動くギヤラクトロン。

ママは橋の上から飛び降り、マスケットを大量生成して一斉に発射。ギヤラクトロンの目に、全火力を一点集中する攻撃を選択した。瞬間、ギヤラクトロンの姿が消える。

ママが驚き、直感的に川岸を見れば、そこには、時間を止めて移動したかのように”一瞬で移動したギヤラクトロンが佇んでいた。

「止められた時の中を動く機械竜……不謹慎にも、胸が疼くわね」

今現在、おそらく、いや確実に『地球最強』である存在を前にしてもなお、ママはその暴挙を止める気配を見せなかった。

インキュベーターは、魔法少女を追い詰めるという確固たる意志をもって、ママとさやかに真実を告げた。

当然、さやかの方も問題が発生している。

暴走するさやかを、杏子とまどかが取り押さえようとする構図が生まれてしまっていた。

「離してよ！ 鬱陶しいのよ、あんたら！」

「離すわけねえだろさやか！ 今の自分のツラ見てみる！ 何するか分かったもんじゃねえ！」

「落ち着いてさやかちゃん！ 何するつもりなの!?!」

「あんたらにはどうでもいいでしょ……」

あたしのことなんて、あたし自身でさえどうでもいいと思っただからさあ！」

インキュベーターは、その気になればいくらでも魔法少女を追い込める。

潔癖な者ならば尚更に。

綺麗な理想を持つ者ならば尚更に。

純粋な少女ならば尚更に。

「もう死んでるんだよ、あたし達！ ゾンビみたいなものなんだよ！」

まどかは精神的な抑えになる。杏子は物理的な抑えになる。

抱きつくまどかを気にして魔法少女の全力を出せないさやかを、杏子が力尽くで羽交い締めにする以外に、今のさやかを止める手段は存在しなかった。

「まどかはいいいよね！」

魔法少女じゃないんだから！

体はちゃんと生きてて、ゾンビでも何でもなくて、無責任に何でも言えて！」

「……っ！」

「何もしてくれないなら、あたしに何も強制しないでよ！」

まどかの傷付いた顔が、さよかの胸を抉る。

「あんただってそうよ、杏子！」

普段ドライ気取ってるくせに、こういう時だけ口出しして来て！」

「近くでバカやってるお前が悪いんだろ！」

ちったあ自分がバカやった結果周りにかかる心配と迷惑も考えろ！」

「……周りのことなんて……！ あたしはもう、どうだって……！」

杏子の言葉が、さよかの心を抉る。

「魔法少女は、もう死んでんのよ！」

この石ころがあたし達の本体で、体は死体を動かしてるだけ！

こんな体で……ソウルジュエムが離れたら死体に戻るだけの体で

……あたしは……！」

さやかを正面から抱き止めるまどかの首に、暖かな雫が落ちて、まどかが泣きそうな顔になっていく。

「あたしが操ってる死体を抱きしめて、なんて言える!？」

こんな体を抱きしめてなんて、言える!？」

心臓が無くなっても死にそうにない、こんなゾンビな体で！

まともじゃない体で！ 好きになってなんて……言えるわけ……！」

さやかを羽交い締めにする杏子の腕に、暖かな雫が落ちて、杏子は怒りを顔に浮かべてキュウベえへの殺意を高めた。

「……本の中でさ、妊娠できない女の人が出るじゃん。

そういう人が、身を引くじゃん。

妊娠できないことを理由にして。

今までずつと分からなかったその気持ちだが、今は分かって……

『こんな自分はあるの人に相応しくない』っていう、劣等感が、よく分かって……!」

さやかは瞳から、止めどなく涙が流れる。

さやかの口から、止めどなく嗚咽が漏れる。

「もう放っておいてよ!」

あたし自身が、こんなあたしはどうでもいいって言うてるの!

もうあたしは魔女を殺す以外に価値のない人間なんだ!

この体は死体で!

本体は血の通ってない石ころで!

こんな体なんて、こんな命なんて、どうでもいい! いくら壊れたっていいんだ!」

(私、何にもできない)

さやかの胸中を絶望が、杏子の胸中を焦燥が、まどかの胸中を無力感が満たす。

「魂もない体で! 石ころの本体で! 好きになって、貰えるわけがないよ……!」

(さやかちゃんを助けたいって、こんなにも思ってるのに……何もできない)

言葉は告げ方で鋭さを増す。魔法少女の真実は、柔らかい言い方で告げてもさやかを絶望で染め上げるものだ。

キュウベえが残酷な言い方をしたならば、そのダメージは計り知れない。

さやかは人としての体を死体、ソウルジェムを石ころと卑下している。

徐々に濁っていくソウルジェムの姿が痛ましい。

このままでは、確実に魔女に成り果てるだろう。

(契約、するしかないのかな。

皆は止めるけど、キュウベえは契約すればなんでもできるって言うてた。

何もできない私が、なんでも叶えられるんだって。きつとさやかちゃんの体だって、元に戻せるはず。

誰かの役に立てるなら……その悲しみと悲劇を倒せるなら、私は……)

まどかの耳だけに、キュウベえが遠方から声を届ける。

”無駄なあがきは諦めて、契約すればいいんだよ”、と。

まどかの中で『自分にしかできないこと』と、『自分にできること』と、『諦めて自分も同じく人であることを捨てる』ことが同一になる。

まどかがキュウベえを呼ぼうとして——その発声を、杏子の大声が遮った。

「諦めんなよ、さやか！ まだ何も終わってねえだろ！」

諦めるな、という言葉が、さやかにもまどかにも突き刺さる。

「無責任なこと言わないでよ！」

「もしかしたら何かが起きて、いい感じに終わるかもしれないねえだろ！」

諦めんな！」

「……はっ、何よそれ。」

最後に愛と勇気が勝つストーリーでも信じてんの？

普段のあんたのキャラに合っていないってんのよ、杏子！」

「うっせーな！ お前だって、そういうものを信じて魔法少女になっただんたろうが！」

「っ」

「一度信じたものくらい、もう一度信じてみるよ！」

この中で、世の中の悲惨さに対し最も割り切ったスタンスを持っている杏子が、まどかに少しだけ前を向かせてくれる。

ふと、まどかはギャラクトロンに花冠をあげた時のことを思い出した。

あの時ギャラクトロンがくれた音楽が、耳の奥に蘇る。

まどかはあの時、ギャラクトロンに『ありがとう』を渡した。

その記憶を思い出したからだろうか？

さやかにも『ありがとう』を渡さなければ、とまどかは思った。その思いが、彼女に宇宙の条理すら踏破するほどの勇気をくれる。

「さやかちゃん。いつもありがとう」

「……？ まどか、あんた何を……」

「自分の価値をそんなに卑下しないで。

さやかちゃんの価値は、なんにもなくなってないよ。

私はさやかちゃんの友達だから、さやかちゃんのいいところを沢山知ってるの」

「っ……！ 魔法少女でもないくせに！

上から目線で、なんの救いにもなってないこと言わないで！」

諦めて契約しよう、と囁くキュウベえの声を振り切る。振り切り続ける。

諦めない。

まどかはさやかを救うことを諦めない。

耳の奥に、まだギャラクトロンがくれた感謝の音楽が残っているから。

「さやかちゃん！」

「まどか！ あんたも、もう、いい加減に……！」

「さつきさやかちゃん、魂とか、命とかが無い体が壊れてもいって言うってたけど！

じゃあさやかちゃんは、ギャラクトロンくんの体なら壊れてもいいって言うの!？」

「——」

さやかが一瞬、返答に詰まった。

「血の通ってない本体を否定するなら、ギャラクトロンくんの体も否定するの!？」

まどかは言葉で畳み掛け、さやかの心に言葉を直接叩きつけていく。

「思い出してさやかちゃん！」

上条くんは！ あのギャラクトロンくんに恋をしたんだよ！」

「——あ」

まどかの放った途方もなく強烈なワードが、トドメとばかりにさやかの胸を打った。

「……まどか、お前……」

「……い、勢いで喋ったけど、間違ったことは言っていないと思う」

「ああ、そうだな。お前は綺麗に証明したよ。上条恭介はソウルジェムにも恋しうるってな」

「そうじゃなくてえー！」

命が通わない体なら、壊れてもいいのか。

石の体で生きるものに、価値はないのか。

恋は、そんなに不自由なものだったか。

否。

否だ。

人類を丸ごと否定する存在であるギャラクトロンは、さやかの苦悩も一つ残らず否定する。

誰かがギャラクトロンの存在を引用してすらそうなのだから、本当に筋金入りに、根底からして人類の否定者なのだろう。

それが、逆にさやかの救いになっていた。

「ははっ」

「！ さやかちゃん、今、笑って……」

「あたし、人間じゃなくなってさ。」

今、まどかに言われて気付いた。

あたし、ギャラクトロンの奴と同じになってたんだね。

恭介が色々あつて恋しちやつたギャラクトロンと同じものに。

あいつは鉄で、あたしは石。

なんかそう思ったら、絶望が前よりハッキリ見えて……でも、胸は苦しくなくなった」

「さやか、お前……」

「まどかの言う通りだわ。」

魂がない体なら、壊れたっていいじゃん、って思ってたけど……

ギャラクトロンの体を好き勝手ぶつ壊す奴がいたら、あたしはきつと嫌な気持ちになる」

「……」

「あいつと似たような体になった、って意識して分かった。

あいつの機体が壊される想像をして、分かった。

恋敵でも、あたしギャラクトロンの奴のこと、嫌いじゃなかったんだね……」

さやかや杏子は、自分の体をゾンビにされたようなもの、と表現した。

言い換えれば、自分の肉体をゾンビのようなものにされたと認識しているということ。

”自分が潜在的に嫌っているものと同じにされた”ということでもある。

だが、自分が好意的に思っているものと同じになった、という認識がそこに加われば果たしてどうなるだろうか？

惚れた男が恋した対象と、同じになったという認識が生まれればどうなるだろうか？

さやかは絶望の闇を振り払い、少しはマシな顔になって、立ち上がった。

「行こうさやかちゃん。皆で一緒に、話をしよう？」

「……うん」

まどかが差し出した手を、さやかが握る。

細く小さな手だと、さやかは思った。

その手が、自分の心を包んでいた暗いものをどけてくれた手なのだと、さやかは正しく認識していた。

「さやかちゃんは答えを急ぎ過ぎなんだよ」

「……まどか、それ、前にあたしに言ったことある？」

「へ？ どうだったかなあ……」

「ま、いつか。どっちでも」

歩き出したさやかは、横でニヤニヤしながら脇を小突いてくる杏子の頭に、軽いゲンコツを落として応えた。

ギヤラクトロンの破壊光線は、大体の場合体の各所にある赤いクリスタル状の部位より発射される。

……だがまさか、そこを真つ先にリボンで覆われるとは、ほむらも予想していなかった。

「これだから巴マミはー！」

ギヤラクトロンの目もすっかりリボンに覆われている。

戦いの最中にマミはギヤラクトロンのセンサー類の位置を見抜き、その全てをリボンで覆い、ギヤラクトロンの感知能力のほとんどを奪う。

無論リボンだけでセンサー類の全てを無効化できるわけではないが、軽快に跳び回るマミの動きを、ギヤラクトロンは捉えきれずに居た。

マミはギヤラクトロンの足の端と自分の体をリボンで結び、ほむらの時間停止の例外対象に自分を追加しつつ、死角からギヤラクトロンの脇腹に砲撃を叩き込む。

「ティロ・ファイナーレ！」

ミシツ、という音がした。

だが壊れない。

ギヤラクトロンは本当に頑丈だ。

おそらく、マミがその魔力の全てを注ぎ込んだ一撃を放つても、その武装の一つを壊せば大快拳、というくらいには。

ほむらの指示でギヤラクトロンがマミと繋がるリボンを切り裂くが、マミは仕込んでいたリボンを励起しまた自分とギヤラクトロンを繋いでしまう。

「私達はいつか魔女になるのよ」

ギヤラクトロンはマミの動きを封じるように右腕を突き出すが、マミは既に知覚しにくいリボンでギヤラクトロンの頭と右腕を繋いでいた。

右腕と頭が繋がれてしまっていたことで、ギヤラクトロンの腕力が、そのままギヤラクトロンの頭を引っこ抜こうとする力に使われてしまう。

「私達はもう人間じゃない。キュウベえは、もう人間に戻ることもないと言った」

ギヤラクトロンが踏み出した足が、” マミが地面に偽装したりボンを踏み、落とし穴に片足を取られる。

動きの止まったギヤラクトロンに、マミはティロ・ファイナーレとマスケット一斉掃射の複合攻撃を仕掛けるものの、マスケットはカンカンと弾かれるだけで、ティロ・ファイナーレは左手の剣で一刀両断されてしまった。

「人でないものから、本当の人でなしになるくらいなら、ここで、いっそここでっ……!」

強い。

ギヤラクトロンはこの地球上で並ぶものが見つからないほどに強く、マミは魔法少女の強さ基準を遥かに逸脱した強さの持ち主だった。

ギヤラクトロンはマミを無力化することができず、マミはどんな手を使ってもギヤラクトロンの装甲を突破することができていない。

両者の強さが、両者の敗北を絶対的に遠ざけている。

ほむらがギヤラクトロンに手を貸してすらそうだった。

このままいけば、マミは魔力切れと絶望で魔女化してしまう。

ほむらからすれば、それだけは絶対に避けたかった。

「攻め手を変えてみましょう、ギヤラクトロン。……ギヤラクトロン？」

ギヤラクトロンが、ほむらの指示を無視してマミに背中を向ける。

「ギヤラクトロン!?!」

よく分からないまま、マミは勝機を察した。

「ティロ・——」

狙うは首。

首の構造を利用し、ティロ・ファイナーレの破壊力をこの原理に集

中し、首をへし折るといふ作戦だ。

彼女の狙いは、無情なほどに的確だった。

「——ファイナーレ！」

だが、攻撃を放った直後、マミは気付く。

ギヤラクトロンがマミに背を向けたのは、そこに魔女の結界を発見し、そこに攻撃を仕掛けていたからなのだということに。

(魔女の結界!?)

マミは今日まで、他の魔法少女から妨害を受けつつも、その妨害を受け流しながら魔女や使い魔を倒していくことも多かった。

それが今、魔女を倒そうとするギヤラクトロンを、マミが邪魔する形になっている。

奇妙な『立場の逆転』がマミの肝を冷やして、自暴自棄の極みにあつたマミの思考に、普段の彼女の思考を差し込んだ。

ティロ・ファイナーレがギヤラクトロンの首へと向かう。

瞬間、ほむらは外に飛び出した。

マミとギヤラクトロンは繋がっているが、マミとほむらは繋がっていない。

ほむらがギヤラクトロンから離れば、ほむらは止まった時間の中を自由に動ける。

今の自分が持つ最大火力を叩き込み、ほむらはギヤラクトロンとマミを繋ぐリボンを破壊。

ギヤラクトロンに触れ、自分だけの時間にギヤラクトロンを招き入れ、二人一緒に——一人と一機で——マミの砲撃を回避した。

「……どうして」

燃え尽きた魔女と魔女の結界と、自由になったギヤラクトロンとほむらを、マミはゆっくり交互に見つめて、疑問を口にする。

「どうして……魔女には躊躇いなく攻撃しているのに、私には攻撃しないの？」

ギヤラクトロンは、露骨にマミに対して手加減している。

ほむらのサポートを受けつつも、殺害という結果を必ずもたらす攻勢を組み立てることなく、あくまで取り押さえることのみを志向して

いた。

ママが全力で攻撃し続けていたのに、ギャラクトロンが全力で攻撃したのは結局、偶然そこに居た魔女だけだった。

ママの問いに、ギャラクトロンはほむらの声で応える。

『人を傷付けないこと』。

”人を守ること”。

”人の味方で在ること”。

まどか様に命じられたことだ。私は人間である君を守らなければならない』

「——っ」

ママは息を呑む。少女の喉から、泣きそうな音が小さく漏れた。

ギャラクトロンにとつて、それは当然のこと。

「私達は、契約をした時から、人間ではなくなったのよ」

『君達魔法少女は人間だ。魔女とは違う。』

相も変わらず他の命を食べなければ生きていけないままだ。

君達は人間を辞めたつもりで居るが、変わったのは魂の容れ物だけだ。

何も変わってなどいない。君達は君達のまま、今も他の命を喰らい続けている』

「それはっ……!」

『繰り返す。』

君達は契約の前と後で何も変わってなどいない。

変わったのは魂の容れ物だけだ。

魔法少女になってもなお、君達人間の間には争いが絶えていないのだから』

「私達は、もう人間じゃないの! いずれ魔女になる存在なのよ!」

『違う。バママは間違っている。』

私の判定は、人類のそれと比べれば絶対的に正しい。

君達は人間だ。君は低レベルな感情に流されて仲間を殺そうとしている』

「低レベル……!?!」

『私は何度でも繰り返そう。君達の考え方は間違っている。私の考えが正しい』

ギヤラクトロンは、それはもうストレートにマミを否定した。

マミ自身が否定されたいと思っっている考え方を、一つ残らず否定した。

マミだって、自分が人間だと思いたい。仲間を殺したくなんてない。

けれど、自分達は人間じゃないと、自分達はいずれ魔女になるから殺さなければならぬと、思わずにはいられなかった。

その想いの全てを、ギヤラクトロンは真つ向否定する。

少し前に戦場に駆けつけたさやか、杏子、まどかもギヤラクトロンの言い分を聞いていた。

『耳が痛い。だから人間は耳を塞ぐ。都合の悪いことは無視する。』

だが、真実は君たちの都合で捻じ曲げられるものではない。君達は人間だ』

「……ギヤラク、トロン……」

『君達は人間であることから逃げられない。決して。』

魔法少女になる程度のこと、君達は自分が自分であることから逃げられない』

ギヤラクトロンは罵倒するように「君は人間だ」と言い放つ。

マミはその言葉を、祝福を受け取るように受け取った。

少女の手の内から、マスクットが滑り落ちる。

「ギヤラクトロンのセンサーは、あなたを人間だと言っているようね。バマミ」

「……曉美さん」

「素直に受け取っておきなさい。私も、あなたも、人間なのだそうだから」

いつの間にか、ギヤラクトロンの胸部が開き中が見えていた。

ほむらの手が、ギヤラクトロンの機体を内から撫でている。

マミは初めて、ほむらがギヤラクトロンに向けるその感情を、その関係に相応なものであると思うことができていた。

「ねえ、約束して」

「ママはギャラクトロンに願う。」

「私達が魔女になったら、私達が誰かを殺す前に、私達を殺してくれるって」

「自分がしようとしていたことを、ギャラクトロンに託すことを。」

「いつか魔女になるその瞬間まで、希望を振り撒くことに、許しを出してくれることを。」

「私達が希望を振り撒く存在から、絶望を振り撒く存在になる前に、私達を止めて欲しい」

「ママは都合のいいことを願っているつもりでそれを口にしたが、地球に生きる生命全てを隙あらば全滅させようとしているギャラクトロンからすれば、頼まれるまでもないことだった。」

『了解した』

今はまだかとの約束で殺していないだけで、ギャラクトロンは今この瞬間にも、食物連鎖という間違った進化を果たしてしまったママを、殺したいと思っている。

「ママが希望を振り撒く時を終え、絶望を振り撒く魔女となってしまった時、絶望を振り撒く前に殺してやることを、ギャラクトロンはママに約束した。」

『残虐な人間が、醜悪な魔女になった瞬間、その命を破壊することを約束する』

その約束が、ママの希望になってくれていた。

「ギャラリーとしてその会話を聞いていたさやかが、大笑いして寝っ転がる。」

「夜空の下、草原に大の字になったさやかの目に映るのは、満天の星空だ。」

「杏子はママ達の下に向かい、まどかはさやかの横に腰を下ろす。」

「まどか、あたし人間だってさ」

「うん」

「あたしの考え、間違ってるんだってさ」

「うん」

「自分を人間じゃないって思うあたしの考えは、間違ってるんだって」
「うん」

さやかは泣きそうな顔で、くしゃつと笑う。

「信じていいのかな、ギヤラクトロンの言い分」

「私に聞いてもしょうがないよ。」

これは、さやかちゃんがギヤラクترونくんの言葉を信じるかどうかという話だから」

信じるも、信じないも、さやかの自由だ。

ただ、ギヤラクトロンの信じられたなら、希望はある。

「信じたいな、うん。あたしは信じたいみたいだ。だから信じられる、信じてる」

ルサールカまで行ったあの夜は楽しかったな、なんて思って、さやかはギヤラクトロンの信じてみることにした。

「こんなあたしだけど、今はちよつとだけ、自分が人間なんだって信じられてるから」

皆知っている。

ギヤラクترونは世辞を言わない。

ギヤラクترونは同情なんてしない。

ギヤラクترونは善意で誤魔化さない。

その言葉はいつだって直球で、だからこそ信じられる。

キュウベえがいくら論理的に正論を吐こうとも、ギヤラクترونが吐く暴論は、キュウベえの正論が生む絶望の尽くを粉碎していく。

それはまさしく、暴走する正義であった。

奇跡も、魔法も、あるんだよ

暁美ほむらに集められたマミ、杏子、さやかの三人は——ほむらが繰り返す時間の中では珍しいことに——全員が何の憂いもなく力を合わせる事ができる精神状態にあった。

「一週間後、この街にワルプルギスの夜が来る」

ほむらの言葉に、さやかが首を傾げ、マミが姿勢を正し、杏子が鼻を鳴らす。

「確かなのか？」

「ギヤラクトロンが観測済みよ」

ギヤラクトロンが居るお陰で、ほむらも皆を納得させられる情報をすぐ出せる。

三人もギヤラクトロンを引き合いに出されたことで、”まあギヤラクトロンだから”ということに納得したようだ。

「ワルプルギスの夜の出現予測は、この範囲」

この範囲をカバーできるようにギヤラクトロンを配置しましょう」

「うわっ、あたしとまどかの行きつけの店が範囲に入ってる」

「あら、じゃあ美樹さんはちゃんと街を守らないといけないわね？」

「さやかもマミも気楽なもんだな。噂じゃ結構やべー魔女だって話だけど」

「問題は、まどかと杏子が未来予知の魔法少女に聞いてきたという話の方よ」

「ん？ マガワルプルギスってやつのことか？」

ほむらにとつての懸念事項は、マガワルプルギス美国織莉子が見たという禍悪降戯過だけだ。

「——っていう未来を見た魔法少女と、あたしとまどかが会って来たってわけさ」

「禍々しく悪しきもの、降り出で戯曲と共に過ぎ去りぬ……只者ではないわね」

「あれ？ マミさん嬉しそうな顔してますね。ビビる様子さえ無いとか、さっすがマミさん！」

「え？ え、ええ、そうね」

織莉子の言い回しが気に入った、とは言い出せない空気の中、マミは曖昧に笑って誤魔化した。

「ただのワルプルギスなら、ギャラクトロンが倒せる。」

けれど、そうでなかったら……私達が何らかの形で加勢することが必要よ」

「ギャラクトロンが勝てない相手にあたしらが勝てるわけねーだろ。サイズが違いすぎる」

「当日は、私がギャラクトロンに乗り込むわ。」

バミミ、美樹さやか、佐倉杏子は随伴して頂戴。

ワルプルギスの使い魔を打ち払い、状況に応じてギャラクトロンの援護をして欲しいの」

ほむらはソウルジエムを手の中で転がす。

そう、ほむらならば、ギャラクトロンの強さを大きくブーストすることができる。

マミの火力であれば十分に火力の底上げも可能だ。

魔法少女が随伴すれば、ギャラクトロンの対応力はただそれだけでグツと上がる。

「まるで、戦車の運用法みたいね。」

戦車もその力を生かすために歩兵の随伴が必要だと聞くけれど」

「マミさん、なんでそんなに戦車の運用に詳しいんですか？」

「嗜みよ」

何故一介の女子中学生がそんなに戦車に詳しいのか？ かつこいからだ。

「でも、暁美さんとギャラクトロンのコンビならきつと誰にも負けないわ」

「マミさんとも互角だったって話ですもんね！」

「からかわないで美樹さん。」

でも、本当に強かったのよ？

私は加減されていたから平気だったただけだもの」

時間を止めて動き回るギャラクトロンの恐ろしさは、マミですらそ

の全てを押し量ることはできなかったが、それでも絶対的だった。どんな災厄が来ようとも、まず負けない。

マミはそう確信している。

マガワルプルギスがどんな魔女であろうとも、負ける姿がまるで想像できなかつた。

ほむらは髪をかき上げ、話を締める。

「全員で、生きて……いえ」

言いかけた言葉を飲み込み、言い直す。

「誰も死なず、誰も壊れず、全員一緒に帰りましょう」

その言い直しの理由が、『全員で生きて帰る』だとギャラクトロンが仲間外れのようなだから』というものであったことを、皆が自然に察していた。

太陽の光も、月の光も、星の光も地上に届かぬ夜が来る。

ワルプルギスの夜が来る。

終焉の舞台装置が来る。

厚い雲が空を覆って、車さえ吹き飛ばす暴風が地上を撫でていた。ワルプルギスの夜は、ある魔女が他の魔女の波動を集め、巻き込み、単体の魔女では到底成り得ないほどの巨大な嵐となったもの。

その性質は無力。

舞台装置の魔女の名の下に、歴史の中で破滅と共に語り継がれ、ひとたび全ての力を発揮すれば地表の文明を引っくり返してしまうと言われている。

だが、それだけだ。

この魔女に人類の虐殺はできて、人類の絶滅など到底叶わない。叶わないはずだった。

今日までは。

ワルプルギスが地上を横切る時、空の向こうから『闇』が落ちて来た。

それは宇宙の遙か彼方、モンスター銀河より飛来した魔王獣・マガオロチの卵だった。

マガオロチはエネルギーの卵を産む、特異な生物である。

何の因果か、銀河の果てから流れ着いたマガオロチの卵は、星に着床する前にワルプルギスの夜という嵐に巻き込まれてしまった。

孵卵器インキュベーターに導かれ、グリーンフィードという卵から孵る魔女のように、マガオロチは魔女と混ざりながら、魔女を苗床とし、魔女を喰らいながら卵より孵化する。

魔女と魔王獣の合いの子が生まれる。

生まれ落ちたそれは、ワルプルギスをベースとした魔王獣だいかいじゅうだった。

天と地の間に悠然と浮き、獯猛に牙を剥く。

通常の生物ではありえない、上も下も無い造形。

どれが手で、どれが足で、どれが角で、どれが翼か。それすらも分からない。

演劇の最後に出て来て、主役を食らう役を割り当てられたような、グロテスクな怪物だ。

それは、主人公の死で物語を終わらせるための舞台装置。

演目の最後を飾る、世界の終わりに来たる者。

——終焉ノ魔王獣。その名は、マガワルプルギス。

「見える？ ギャラクトロンくん」

まどかの声に応え、遙か彼方のマガワルプルギスを見つめるギャラクトロンが頷いた。

「そっか。ギャラクトロンくんは、あれと戦いに行くんだね」

ギャラクトロンは頷く。

自分にどこまでも忠実で、自分の言いつけを守って人間の味方をしてきているギャラクトロンの姿が、ふとまどかに罪悪感を覚えさせた。

「……『他人の行動を制限すること』って、いいことなのかな、悪いことなのかな」

ギャラクトロンが今人間と共に歩んでいるのは、まどかにそう命じられたからだ。

命令だから従っている。

命令だから共存している。

それは、ある意味では共存の強制とも言える。

「私もね、昔は家の床に落書きしたり、遊びでお皿を割ったりしてたらしいの。」

そのたびに、ママやパパに『これはしてはいけないことだ』って言われて、学んだの」

地球は、短い生涯を生きる命が、弱肉強食の法則の下に食らい合い、親から子へと何かを伝えていくことで、誰もが繋がっていく命のサイクルを成立させる星だ。

”これはしてはいけないことだ”と教わることで、命は成長していく。

ギャラクトロンは”争いも食物連鎖もしてはいけないことだ”という行動原理を掲げ、まどかの教える”人を殺すのはしてはいけないことだ”という教えをその上に重ねている。

生き物にしてはいけないことを教えているのか。

機械に複数の命令を入力しているのか。

ギャラクトロンを見ると、まどかはその両方をしているような気もするし、そのどちらもしていないような気もしている。

自分の言葉がギャラクトロンの心に届いているのか、ギャラクトロンに心があるのか、それすらまどかには分からないのだ。

「私がギャラクトロンくんにしたことって、パパとママのそれと同じなのかな。」

それとも、全然違うような酷いことだったのかな。……私、分からなくなってきた」

まどかは、ギャラクトロンが嫌いではない。

ただ、自分の命令が残っていないければ、好き嫌い以前の問題になっってしまうということも分かっている。

まどかとギャラクトロンの間にはまだ、積み重ねた時間があまりに

も足りていない。

「ちゃんと帰って来てね。」

それで、またお話しようね。

私がおかをしなくていいって言わなくても、いつか一緒に居られたらいいなって、そう思うの」

けれどもいつかは、何か奇跡が起こって、ギャラクトロンが自分から進んで命の守護者になってくれる未来もあるんじゃないかと、まどかは思っている。

そんな未来があってくれたら嬉しいと、そう思っている。

「皆を守ってあげて。皆で笑って終われる未来を、私信じてる」

ギャラクトロンは頷き、迎えに来たほむらを胸の内に入れて、魔法の産む暗黒の雲に覆われた暗い世界を飛翔した。

「まどかも心配症ね。……今日は頼りにしてるわよ、ギャラクトロン」
『了解した』

ほむらの口元に笑みが浮かぶ。

——誰も、未来を信じない。誰も、未来を受け止められない。だったら、私は……

——もう誰にも頼らない。誰に分かって貰う必要もない

——全ての魔法は、私一人で片付ける。そして今度こそ、ワルプルギスの夜を、この手で

自分でそう言っていた時が、何故か遠い昔に感じる。

そんな前回のループだっただろうか、と思うが、余計なことを考えるのはやめた。

今日の戦いに勝てば、全てが終わる。

長い旅も。

時の繰り返しも。

全てが終わわり、平和がやってくる。

未来を信じるまどかに送り出され、頼れる機械の竜も居る。然らば何の憂いも無い。

この魔法を——魔王獣を——越えた先に、暁美ほむらの希望はあった。

ギャラクトロンは大通りに着陸し、赤黄青の信号機魔法少女達を従え、街中に立つ。

「さあ、行くわよ！　これを最後の時間にするために！」

『奴を、リセットする』

ほむらに止められた時間の中で、ギャラクトロンはチャージに時間のかかる最強攻撃『ギャラクトロンスパーク』のチャージを開始。

そして情け容赦なく、星の生態系をリセットするほどの砲撃を、解き放った。

その砲撃が、絶望を呼ぶ。

ギャラクトロンスパークは、間違いなくギャラクトロン最強の攻撃だ。

これを初手に選んだのは、ほむらとギャラクトロンが共に合理性の塊だったからだろう。

動き出した時の中で、トラックさえも引っくり返すマガワルプルギスの暴風を、大気ごと消滅させながらギャラクトロンスパークが突き進む。

やべえ、と杏子は勘でその威力を理解する。

これはもう魔法少女の次元に無い、とママは感覚で威力を測る。

すっげ、太陽も焼き尽くせそう、とさやかは理性で感嘆した。

その評価が、そのまま絶望に転換される。

「あの光を……食ってる……!?!」

マガワルプルギスが、ギャラクトロンスパークを食っていた。

まるで、砂糖菓子を噛み砕いているかのように、美味しそうに食べていた。

「くっ、近付いてくると、暴風のせいで魔法少女でも立っていられねえ……!」

「待って、杏子。なんか、暴風とは関係なく、あたしらの体……引き寄せられてない!」

魔法少女の力で踏ん張らなければ立っていることすらできない、か

き混ぜるような暴風の中、確かにマガワルプルギスへと引き寄せられる力が発生している。

川の水が、無尽蔵な空の雲が、この街に存在する大気が、避難が完了したビルや家屋が、舗装された路面と大地が、片っ端から引き寄せられている。

そして、引き寄せられたものは、マガワルプルギスに捕食される。上下左右前後を問わず、遠近問わず、形があるかどうかさえも気にしない、絶対的捕食行動。

「世界を……この星を……形の有るものも無いものもお構いなしに、全部食べようと……!?!」

見滝原が食い尽くされれば、おそらく次はこの星そのものを補食しにかかるだろう。

「あれはもう、怪獣の形をしたブラックホールに近いものよ!」

ママは叫ぶ。

捕らわれれば光さえも脱出できない、光さえも捕食する闇の塊。

それが、今のワルプルギス。魔王獣マガワルプルギスの在り方であつた。

「ギヤラクトロン、もう一度時間を止めるわ。

もう一度ギヤラクトロンスパークを撃ちましょう。

今度は頭上から、着弾ギリギリまで時間を止めてから撃つわ!」

ほむらがまたしても時間を止める。

だが、止まらない。

マガワルプルギスは止まらない。

止められた時間の中を、マガワルプルギスはギチギチと動いて、時間を止めているほむらの盾がガチガチガチと嫌な音を立て始めた。

「な……!?!」

止められた時間の中を動けるのは、ほむらとほむらが許した者しか居ないはずなのに。

「止められた時間を……時間を食ってる!?!」

マガワルプルギスは、世界を食らう。星を食らう。空間ごと食らう。

魔法少女が止めた時間を認識して、それさえも食らおうとする。マガワルプルギスによって『ほむらだけの時間』はぺろりと平らげられ、彼女らの下に元の時間が返ってきた。

ギャラクトロンは頭上を取るのをやめ、左手のギャラクトロンブレードを構えた。

『これは、宇宙を脅かす害悪と成り得る』

「ええ、どの道……こいつを倒さなければ、私達に明日はない！」
踏み込み、斬りつける。

だが頑強な骨、強靱な筋肉、強固な皮膚に頑丈な体毛で守られているマガワルプルギスには、あまり有効な攻撃にならない。

体毛の上を剣が滑って、体毛を何本か切り落とすに留まった。

マガワルプルギスが笑う。

狂った童女のように。

荒れ狂う獣のように。

ほむら達の無力を嘲笑する。無為を嘲笑する。無駄を嘲笑する。

無価値を嘲笑する。

嘲る笑いは、気持ちの悪さと腹立たしさの両方を感じさせた。

「マミさん！ 杏子！ 何か来るよ！」

笑いながら、マガワルプルギスの体から小さなものがいくつも生まれる。

それはワルプルギスがこれまで嵐の中に巻き込んできたもの。

無数の魔法の残滓であり、魔法少女の残照だ。

マガオロチの卵という無形のエネルギーが、それら魔法少女の成れの果てと結びつき、魔法少女の魔法属性エレメントに沿った形に分体を形成した。

言うなれば、『少女ノ魔王獣』。

それぞれの魔法少女のエレメントに即した存在でありながら、一体一体が人間サイズの魔王獣かいじゅうでもある、マガワルプルギスの分身だった。

「佐倉さん！ 美樹さん！ これを、ギャラクトロンに近付けさせては駄目よ！」

魔法少女の戦いもまた、始まった。

「くうっ……！」

さやかが少女ノ魔王獣の一体と剣を合わせる。合わせたのはいいが、ジリジリと押され始める。

腕力でも、魔力でも、少女ノ魔王獣は明確にさやかの上を行っていた。

「バカ、何やってんだ！」

杏子は二体の少女の魔王獣の攻勢を捌きながら、さやかを襲っている少女ノ魔王獣の脇腹に蹴りを入れてさやかを助ける。

その上でギヤラクトロンの背後を守る位置取りを意識し、ギヤラクトロンの背中に放たれる魔王獣達の魔法を切り落とし続けていた。

「流石に、これは……！」

マミは一番忙しくしていた。

マスケットを撃ち、リボンを手で振るい、足で踏んだ路面に魔法でリボンの罫を仕掛ける。

他の者達が一手打つ間にマミは三手を打つペースで対処を続け、総合的に見れば実に十二体の少女ノ魔王獣を自分一人で処理し続けている。

それでも足りない。

「手が、足りない！」

巨躯の少女ノ魔王獣が、ギヤラクトロンの膝裏に体当りした。

ギヤラクトロンの膝が曲がり、姿勢が崩れ、マガワルプルギスの体当たりがギヤラクトロンの巨体を横倒しにする。

少女の姿とはいえ魔王獣。

その力は、ギヤラクトロンの細かな妨害やダメージを与えて余りあるものだ。

「佐倉さん！ 美樹さん！ 乱暴なやり方でも良いわ！」

魔力もグリーンフシードも出し惜しみしないで！

この戦いで……いいえ、短期戦で全て使い切るくらいの気持ちで戦って！」

「分かりました、マミさん！」

「気軽に言ってくれんなあつたくー！」

少女ノ魔王獣を放置すれば、どう足掻こうがギャラクトロンはマガワルプルギスに勝てなくなってしまう。

魔法少女達も必死だ。

彼女らは今の自分が持てる全てを注いで、ギャラクトロンの背中を守る。

「ギャラクトロン、もう一度時間を止めるわ。合わせて！」

『了解した』

ほむらが時間を止め、マガワルプルギスは止まる気配すら見せず、ほむらだけの時間を食らう。

だが、それは囷だ。

もはやほむらの時間停止はマガワルプルギスに餌をやること以外の何もできないが、それでも餌かつ囷の役目を果たすことはできる。

ギャラクトロンの右腕が分離し、飛翔し、マガワルプルギスの背後に回り込んでその背後から雷撃を叩き込む。

更には正面から剣を構えたギャラクトロンが突撃した。

普段は超重量でゆったりとした動きをするギャラクトロンが、全体重をかけ体当たり気味に剣を突き出す。狙うは頭。

(決まった！)

ほむらが決まったと思った、その瞬間。

マガワルプルギスが、嘲笑った。

「っー」

マガワルプルギスの全身から、あらゆる破壊が垂れ流される。

炎、氷、木、闇、光。時にはビーム、時には雷、時には魔法少女の武器の形となって、マガワルプルギスの360。全方向へと攻撃が放たれてゆく。

それはギャラクトロンの分離右腕にも当たり、ギャラクトロン本体にも当たり、魔法少女達にも当たる軌道で放たれる。

「ギャラクトロン、攻撃をつ——！」

ほむらは、攻撃の継続を勧めた。

攻撃することで敵の行動に負荷をかけようとした。

されど、ギヤラクトロンは無視する。

ギヤラクトロンは敵の攻撃を左手一本で弾きながら後退し、右腕をマミと杏子とさやかを守るために飛翔させた。

右腕は空を飛び、マガワルプルギスの攻撃の雨の中を突っ切って、過剰なダメージを受けながらさやか達の守りに入る。

マガワルプルギスの攻撃終了後、ギヤラクトロン本体は左手の剣によって守り切れたが、逆に魔法少女を守るために使われた右腕は、二度と動かせないほどに壊されたただの鉄屑と化していた。

「……あなた、そんなにあの子達を守りたいの？」

『それが私に与えられたコマンドだ』

「本当に……本当に、私の繰り返しは……いつだって……」

倒せと、製作者に言われた。

守れと、まどかに言われた。

争いを産む敵を倒すか、今足元に居る人を守るか。

二つのコマンドの内から後者を選んでいるのは、ギヤラクトロンだ。

その選択が、ほむらには心底計算外で、彼女の心に重いものがかかる。

「これはある意味、当然の結末だったのかもしれないね」

「！ インキュベーター!? ここはギヤラクトロンの中よ、どうやって……!」

「色々和小細工をして、君の盾の中に潜んでいたのさ。」

君の盾の中ならギヤラクトロンにも見つからない。

この方法なら、安全にギヤラクトロンの内部に入ることができるといっわけだね」

マガワルプルギスと切り結んでいるギヤラクトロンの中で、ほむらがキュウベエの額に銃を突きつける。

「暁美ほむら。君の感情は、特に理解に苦しむよ。」

君は善意で動く人間を信頼していなかった。

むしろ打算と合理性で動く人間の方を信用しているフシすらあった。

君は何故か分からないけど、善意で動く者を味方として信じることをしなかったよね」

「黙りなさい」

「だから、ギャラクトロンは君の味方になれたわけだ。

あれほど善意や良心から遠い存在はそう居ない。

善意で動かない、善意が生む悲劇を生み出さない、だから君はギャラクトロンを信頼した」

ギャラクトロンが敵の打倒より人の守護を優先したという事実が、ほんの一瞬でも『ギャラクトロンに良心があるように感じてしまった』という事実が、ほむらを揺らがせている。

「君にとって、ギャラクトロンは希望だったんだろう？」

あらゆるものを破壊し、君の願いを叶えてくれる暴虐の希望。

けれど、それは違う。

君が信じて頼ったギャラクトロンは、君に絶望を運んで来たんだ」
ほむらが構えた銃口が、震え始めた。

「君は時間と因果を螺旋状に繋げている。

気付いているだろうか？」

ワルプルギスの夜は必ず現れる。

まどかはループを繰り返す度に強くなっている。

前のループで起きた面倒事は、次のループでも起きやすくなっている。

だからね、次回以降のループではおそらく、マガワルプルギスが必ず登場するようになる」

引き金にかかる指までもが震え始める。

「ここでギャラクトロンが勝てないのであれば、それで終わりだ。

もうマガワルプルギスは鹿目まどか以外の誰にも倒せなくなるだろう。

君の全ての行動が無意味になるループの到来、というわけさ。

まどかが契約しなければ絶対に倒せない、舞台装置の敵が固定されるわけだからね」

銃を握る手が、力なく垂れ下がった。

「もう何人魔法少女を救おうとも意味がない。

もう何体魔女を倒そうとも意味はない。

地球の全ての戦力を集めても、マガワルプルギスは倒せないだろう。

君の次回以降のループの結末は確定した。君にはもう、まどかを救えない」

「分かってるんだろう？　ここが、君の努力の終着点だ」

そして、マガワルプルギスの光線が、ギヤラクトロンの胸部を貫いた。

ほむらが衝撃で、胸の穴から外へと放り出される。

魔法少女の身体能力で衝撃に耐え、着地できたものの、常人であれば間違いなくミンチになっていた。

そんな彼女の前に、同様に着地したキュウベえが歩み寄る。

キュウベえの目には、ほどよく濁ったほむらのソウルジェムがよく見えた。

「受け入れるんだ、暁美ほむら。ここが君の願いの果て、祈りが迎えた呪いの形さ」

「私、はっ……！」

そんなキュウベえを、ギヤラクトロンが踏み潰した。

人間の体を借りて人の言葉を喋る機能も、胸部を破壊された時点で既に無い。

だから無言で、ギヤラクトロンは戦い続けた。

けれど、胸部を破壊された時、胸部の内に保管されていたまどかの花冠が外に飛び出してしまっていた。

飛び出していった花冠は、暴風に揺られながらふらりと落ちて行き、マガワルプルギスの吐き出した破壊光線の射線に入ってしまった。

そんな、ただの花冠を、ギヤラクトロンは身を挺して守った。

マガワルプルギスの光線が、ギヤラクトロンの顔の右半分と、右目を破壊し粉碎する。

——いつも皆を守ってくれてありがとう

まどかがそう言って、感謝の気持ちと共に渡したというだけの、ただの花冠だ。

花冠が壊れれば、まどかの心が傷付くかもしれない。

そんな単純な理屈での行動だったかもしれないし、そうでないのかもしれない。

ただ、人を守れとは言われたが、花冠を守れとは言われていないことは、動かしようのない事実で。それを見たほむらは、何かを噛み殺すような表情で、無力感に耐えていた。

「ギャラクトロン……！」

人間を、花冠を、ギャラクトロンは自己の判断にて守る。

それが自分に入力されたコマンドだと口にして、命令に沿って皆を守る。

守って、壊れて。

助けて、壊れて。

救って、壊れて。

入力された命令に沿って、マガワルプルギスから人を守る。

「バカ、そんなボロボロな体で……！」

杏子を守った。

左手の剣を、杏子を守る盾とした。

「もういい！ もういいから！ あんた十分、頑張ったから！」

さやかを守った。

その代価として、左腕を根本から引きちぎられた。

「待って……待ってっ！」

マミを守った。

その代価として、防御に使った右足を粉碎された。

後頭部から伸びる竜の尾を使って体を支えたが、もう普通に立っていることすらできない。

——皆を守ってあげて。皆で笑って終われる未来を、私信じてるまどかの最後のコマンドを、ギャラクトロンは自らと引き換えにしても果たそうとする。

ギヤラクトロンは思考する。自分に笑う機能は無い。『皆』に自分は含まれていない。ゆえに『笑うことができる人間』だけを守りきればいい。それでコマンドは達成される。

笑えない自分を、後に残す必要はない。

ギヤラクトロンは、そう思考する。

帰って来て、というまどかのコマンドは後回しにして。

またお話しようね、というまどかのコマンドは後回しにして。

争いに繋がるものを全てリセットせよ、という最初に入力されたコマンドすら後回しにして。

自分の中に入力された、複数ある矛盾するコマンドの中から、自らの意志で優先すべきものを選択していく。

そして、音楽が流れた。

「え……これ……」

それは、魔法少女達にも聞き覚えのある、ギヤラクトロンの優しい旋律。

争いを止めるという意志が込められた歌。

同時に、ギヤラクトロンスパーク発射直前、攻撃を宣告する際に使われる音楽でもあった。

「ギヤラクトロンー」

ギヤラクトロンはギヤラクトロンスパークの発射準備をし、片足で飛びかかり、後頭部から伸びる竜の尾でマガワルプルギスの首を掴む。

二本の腕も、片足も、片目も無くしたギヤラクトロンの勝機は一つ。至近距離からのギヤラクトロンスパークしか無い。

ギヤラクトロンは自壊も覚悟で、竜の尾で掴んだマガワルプルギスに、至近距離からのフルパワーギヤラクトロンスパークを叩き込もうとし――

「いいのかい？ そつちにはまどかが居るけど」

――そんなギヤラクトロンの耳元に、キュウベえがどこからか声を

届けた。

居た。

キュウベエの言葉で、まどかの位置を把握してしまったギャラクトロンのにはもう撃てない。

万が一にもマガワルプルギスが回避行動を取ってしまえば、ギャラクトロンスパークにまどかが巻き込まれてしまう可能性がある。

ギャラクトロンは射角を計算し、まどかには絶対には当たらない角度でギャラクトロンスパークを放とうとし……その僅かな発射の遅れが、マガワルプルギスの反撃を許してしまった。

マガワルプルギスの腕が、角が、光線が、魔法が、反撃として叩き込まれる。

ギャラクトロンの竜ギャラクトロシヤフトの尾は千切られる。

ギャラクトロンの腹に大穴が空く。

顔の左半分までもが破壊され、残った方の目すらも潰される。

最後の足までもがもぎ取られてしまった。

両腕両足両目、加えて尾に全ての武装まで奪われて、胸と腹に大穴を空けられたギャラクトロンが地に落ちる。

暁美ほむらの悲鳴に似た絶叫が、戦場に悲しく響き渡っていた。

避難所近くの高台から、その戦いを遠目に見守っていたまどかが、膝を折った。

ギャラクトロンの体は大きいがために、その敗北は遠くからでもよく見える。

膝を折り、口元を抑え、今にも泣き出しそうなまどかの前に、微笑むキュウベエが現れた。

「やあ」

舞台装置の魔女がその役割を果たした今、物語は最終局面に入る。

「どうやらもう、君が契約しなければどうにもならなくなってしまう
たようだね」

「……ギャラクトロンくんが壊れるまで、待つてたの？」

「僕がその問いにはいと答えてもいいえと答えても、君の中で答えは
決まってるんだらう？」

「じゃあ僕が答えるだけ無駄じゃないか、とキュウベえは顎の下を搔
きながら言った。

キュウベえからすれば、まどかを魔法少女にするためには——その
後魔女にするためには——ギャラクトロンが壊れた後、まどかが契約
してくれた方が都合が良かったのだらう。

それゆえ、このタイミングでまどかに接触してきたのだ。

「願いでギャラクトロンを直しても、ギャラクトロンではアレには勝
てないよ。

君がマガワルプルギスの打倒か、より強い力の獲得を願うしかな
い。

仮に他の願いで君が魔法少女になっても、君は総エネルギー量が多
いだけの魔法少女だ。

それではマガワルプルギスは倒せない。あれは、文明の転覆者にし
て星の捕食者だからね」

最強の魔法少女になるとい願いで、まどかが魔法少女になるか。

マガワルプルギスの打倒に願いを使うか。

そのどちらかですか、もうマガワルプルギスは倒せない。

そしてキュウベえからすれば、マガワルプルギスを倒せない結末に
至っても別に構わないのだ。

適切なことに願いを使わず、まどかが足りない力量でマガワルプル
ギスに挑み、戦いの中で絶望して魔女になってくれても一向に構わな
い。

エネルギーが回収できることには変わりないからだ。

この状況に持ち込んだ時点で、キュウベえの望みは叶ったも同然と
言っている。

ここからどう転がろうとも、インキュベーターは宇宙を救うことが

できるだろう。

「さあ、鹿目まどか。

祈りを言葉にするといい。

その魂を代価にして、君は何を願う？」

「うん」

ほむらが時間を繰り返し、因果を束ねた鹿目まどかという特異点には、あらゆる願いを叶えるに足るエネルギーが充填されている。

だが、ここに計算外があった。

誰にも予想できないものがあった。

おそらくこの瞬間、まどかの胸に秘められた切実なる思いを予測できていた者は、この宇宙に誰一人として存在していなかったのだから。

「私は、皆が一人でないことを証明したい。

誰もが一人じゃないことを証明したい。

そこに、希望の光が有ることを証明したい。

誰だって……辛い時、誰かに助けて貰えるって、証明したい」

「へえ」

キユウベえは、まどかの願いが予想外で期待外れだ、と言いたげな様子だった。

「今、誰が助けに来てるって言うんだい？」

君達を助けになんて、誰も来ていないじゃないか。

きみたち
人間はいつもそうだ。

『誰かが助けてくれる』という希望を無根拠に持つ。

そしてその希望が裏切られると絶望する。わけがわからないよ」

「そうだよ。私はいつだって信じてる。

私が辛い時には、友達が助けてくれる。

友達が辛い時は、私が助ける。

難しいことだと分かっているけど……それが一番だって、私は思うから」

まどかの祈りが『希望』であることを、まどかだけが知っていた。

「誰だって一人じゃない。ギャラクトロンくんだって……一人じゃない

い」

それは寄り添う祈り。助け合いを肯定する祈り。差し伸べられた手に希望を見る祈り。

「私は証明したい。」

自分が困った時、誰かが助けてくれる。

誰かが辛い時、他の誰かが助けてくれる。

皆一人じゃないって、誰かが助けてくれるんだって、証明したい。ほんのささやかな、助けを求める声を発する祈り。

「これが私の祈り、私の願い」

助けを求める誰かに手を差し伸べる誓い。

手を差し伸べてくれる誰かに手を伸ばすという救い。

命と命が助け合うという、この宇宙で最も美しい円環の肯定。

「さあ、叶えてよ！ インキュベーター！」

キュウベえはその祈りの本質を理解しないままに、まどかの祈りを奇跡に変える。

「ここに、希望の——『光』を！」

光の祈りが、あらゆる前提を覆すほどの奇跡を喚んだ。

ワルプルギスが地上を横切る時、空の向こうから『闇』が落ちて来た。た。

まどかが祈りを形にしたその時、空の向こうから『光』が落ちて来た。た。

マガオロチの卵が空の向こうから落ちて来た時のように、空の向こうから雲を切り裂き、光が落ちてくる。

光は、まだ動いているギャラクトロンにトドメを刺そうと接近するマガワルプルギスの前に降り立ち、ギャラクトロンを守るように立つ。

「光……」

誰かが、思わず言葉を漏らす。

「でっけえ」

大きな光を見上げ、呆然とする。

「光の……巨人……？」

そして、その名を呼んだ。

光の巨人と呼ばれたそれが、声に応えて名を名乗る。

「俺の名はオーブ」

ギャラクトロンは、まどかの心をオーブに例えた。

誰ともぶつからない優しい円オーブの心を、ずっと賞賛オーブし続けた。

ならば彼女が捧げた祈りは、とても優しい『円環オーブの祈り』に他ならない。

「闇を照らして、悪を撃つ！」

ギャラクトロンが、間違い暴走した正義なら。

その光はいつだって、誰かを守る『正義の味方』であった。

私の、最高の——

機械は夢を見られない。

だから、これはただの記録だ。

壊れかけのギャラクトロンが、最期の終わりを迎える前の、走馬灯のような記録の閲覧。

ギャラクトロンの始原の記憶だ。

「奴らは何を観測したというのだ」

「不明です。争いを無くすため、過剰に多くの対象を攻撃しようとしているようです」

「これでは量産した意味がまるでないではないか。

兵器は正しく運用できて初めて兵器なのだ。

このままでは、敵と味方を諸共にリセットする欠陥兵器にしかならんぞ」

ギャラクトロンを作った者達が、何かを愚痴っている。

「仕方がない。初期型は全て他次元に廃棄しろ。

こちらの次元には戻って来ないほど遠くの次元が望ましい」

「では、マルチバースレベル2以降の世界からいくつかを選定しそこに廃棄します」

宇宙学者のテグマークは、多元宇宙をいくつかのレベルに分類した。

『全て』を内包するマルチバースレベル1。

宇宙の隣には別の宇宙があり、無数の宇宙の集合が有るというマルチバースレベル2。

”あの時別の選択肢を選んでいたら”というもしもの並行世界を表すマルチバースレベル3。

そして「人間の想像の数だけ宇宙があるんじゃないか？」という、「漫画や二次創作の宇宙も現実に存在する可能性はある」と言えるマルチバースレベル4。

次元を超えた不法投棄を可能とするほどに、ギャラクトロンの製作者達は——その文明は——非常に高いレベルの技術を持っていた。

「原因究明も急げ。

こやつらが何を観測したか、それを特定するのだ。

でなければ同じことを何度も繰り返しかねん」

「了解しました。しかし、一体何を観測したのやら……」

まだギャラクトロンと呼ばれていなかった頃のギャラクトロンは、宇宙に女神の姿を見た。

希望に始まったものが、絶望に終わるといふ運命を覆した宇宙の女神だ。

宇宙に溶けて概念と果てた女神の姿を、ギャラクトロンの瞳は捉える。

それが、製作者の意図しない方向にギャラクトロンを導いてしまった。

女神を見て、美しい、と機械の心は思ってしまった。

それがそのまま、バグになる。

機械には、美しさを感じる心など無かったからだ。美しさを受け止める心が無かったからだ。

ギャラクトロンは元々、争いを止めるためだけのロボットだった。

それが、インキュベーターに食い物にされていた魔法少女達を救うべく、女神となった少女を観測してしまったことで狂い始める。

過剰な食物連鎖の否定。

強者が弱者を食い物にする関係の否定。

『他者の食い物にされ終わる』という、悲劇の結末の否定。

ギャラクトロンはその瞬間から、暴走する正義と化した。

希望が絶望に終わるといふ仕組みを否定し、そこから搾取するやり方を否定した優しい女神の信奉者からすれば、他生物から奪い続ける生態系はさぞかし醜悪に見えたことだろう。

皮肉にも、美しいものを見たことが、機械に醜い歪みを生み出す原因となっていた。

「廃棄、廃棄、廃棄つと」

ギャラクトロン達が、次々と異次元に投棄されていく。

とある世界の鹿目まどかは、過去と未来の全ての宇宙の魔女を消し

去るという干渉を行い、この宇宙にも既に干渉済みだ。

全ての宇宙に鹿目まどかは存在しておらず、全ての宇宙に女神の法則が存在する。

ならば何故、ギャラクトロンは魔女もまどかも存在する宇宙に辿り着いたのか？

それが、マルチバースレベル4。

まどかが女神となっても、ほむらが悪魔となっても、それらとは一切無関係に魔女と魔法少女の物語が展開される多次元世界。

ギャラクトロンが辿り着いたのは、物語の”もしも”を描いた外伝や、”こうなっていたら”を描く二次創作のような宇宙であった。

女神となった者が、悪魔となった者が、”何の憂いもなく幸せになれる世界”を夢に見れば、その時点でその宇宙は現実存在することとなる。

それが、マルチバースレベル4。

夢のような世界にも、悪夢のような世界にもなる、無限の可能性を持った宇宙だ。

すなわち、『鹿目まどかが全ての宇宙の魔法少女を救った』という事実と、『鹿目まどかが干渉していない宇宙が存在する』という事実は並立する。

『鹿目まどかは既に全ての宇宙に存在していない』という事実と、『鹿目まどかがこの宇宙に存在する』ということは一切矛盾しない。

それが記述可能であれば、ありとあらゆる矛盾を超越し、どんな記述条件でさえも内包可能であるのが多次元宇宙である。

女神が居たから、ギャラクトロンはここに来た。

女神も居ない、悪魔も居ない、皆が人のまま在るこの世界にやってきた。

そして、人で在る彼女らを守ろうとした。

けれど、力は足りなくて。

守ろうとしても、守りきれなくて。

聖の対になる魔を前にして、ギャラクトロンは粉碎された。

ギャラクトロンは過去を思い返すのをやめ、現在を見ろ。

砕かれたギャラクトロンを守るように、光の巨人・ウルトラマンオーブが立っていた。

光の巨人だ、と誰もが思った。

ウルトラマンオーブは、魔女のように姿を隠さない。

マガワルプルギスのように闇をもたらさない。

ギャラクトロンのように魔力を持つ者だけが見えるよう小細工をしているわけでもない。

ただ、自分には恥じるものなど何一つ無いとでも言うかのように、堂々とそこに立っている。

その姿を見た一般人も居た。

だが、明日には災害の中で見た夢幻だとも思うようになるだろう。

一夜の夢としか思えないような、美しく絢爛な光が闇夜の黒を切り裂いている。

「シャアッ！」

オーブは前が出る。

マガワルプルギスが口の中に光を溜めて、それを吐き出したからだ。

オーブは他の誰にも攻撃を当てないように、鏡の如き盾を生成して逸らすように防御する。

幸い光線はビームではなくレーザーだったようで、鏡の盾は難なく光線を空へ逸した。

天空を覆う厚い雲が、宇宙まで届く大威力レーザーによって切り裂かれて行く。

オーブは盾を構えたまま、レーザーが途切れる直前に形態を変えた。

「紅に燃えるぜ！」

形態変化の完了と、レーザーの照射終了と、鏡の盾の消失はほぼ同

時。

真紅の格闘形態に変化したオーブは、マガワルプルギスの頭上を取るように跳躍した。

跳躍中、オーブの視界に壊れたギヤラクトロンと、壊れたギヤラクトロンを揺さぶり声をかけ続ける少女達の姿が見える。

少女を守り粉碎されたギヤラクトロンを見て、オーブは何を思ったか。

マガワルプルギスに叩き込まれた燃えるキツクの強烈さから見て、怒りと同情に近い感情を感じていることだけは、間違いなかった。

「熱っ！」

さやかかが戦闘の余波で飛んで来た火の粉が肌に触れたことで、熱がって肌を叩いた。

オーブが燃えるキツクを叩き込んだから、というだけではない。

マガワルプルギスの全身がそれで燃えたから、というだけではない。

魔法少女の残骸を使つて作られた魔王獣が、マガワルプルギスの全身から炎を引き剥がしてそこかしこに放り投げ始めたからだ。

マガワルプルギスから炎を引き剥がした後、少女の形をした魔王獣達は、一斉にウルトラマンオーブへと群がった。

「光を越えて、闇を斬る！」

オーブの形態がまた変化し、よりスマートな形態になって手に槍を持った、と思われたまさにその瞬間。

人が瞬きを一度する程度の一瞬で、オーブは少女ノ魔王獣の合間をすり抜け、終焉ノ魔王獣の横を抜け、マガワルプルギスの遙か後方にまで移動していた。

移動と並行して、全ての少女ノ魔王獣を真つ二つにしマガワルプルギスにも一太刀入れている。

瞬間移動と同義の、超高速移動攻撃。

神速の走破と神業の槍技が敵を討つ。

少女ノ魔王獣は声を上げる間も無く、一匹残らず両断される。

終焉ノ魔王獣は本体らしく、攻撃に耐えつつも絶叫する。

そしてオーブは、マガワルプルギスに叩き込んだ槍がポツキリと折れたことに驚愕した。

「！」

皮膚に一瞬接触しただけで、武器の構築エネルギーが捕食されたのだ。

あらゆるものはエネルギーで出来ている。物質ですらそうだ。構成に使われているエネルギーが食われれば、後は崩壊するしかない。

だが、その一撃が光明を見出してくれた。

オーブが疾風の如き一閃を叩き込んだ箇所は切り傷の奥に——マガワルプルギスの額に——肉に隠された、赤いクリスタルが見えたのだ。

それがただのクリスタルなら、肉の奥に隠す必要はない。

それがただ固いだけのものなら、肉の上に乗せて肉を守ればいい。硬い肉と毛皮でそれを守っていたということは、つまり、そのクリスタルが『弱点』である可能性が高いということに他ならない。

マガオロチとワルプルギスの融合過程で何かがあったのか、それともまだ二者が完全無欠に融合していないのか、あるいは二者の相性がそこまで良くなかったか。

想像ならば幾らでもできる。

だが、今ここにある事実として、そのクリスタルは非常に脆い状態にあった。

「銀河の光が、我を呼ぶ！」

オーブがまたしても形態を変える。

複数の力を重ねる力の運用を止め、自分の内にある最も大きな力を……聖剣の力を聖剣ごと引き抜いた。

マガワルプルギスが大量の魔法を浴びせかけるが、オーブは自分の体を衝撃で押し戻してしまっただけを切り払い、急所に当たるものだけを叩き落とし、突き進む。

”離れた場所から光線を撃つても食われかねない”と判断したがゆえに、オーブはクリスタルに剣先を叩きつけ、同時に聖剣から光を

放った。

「オーブスプリーム……カリバアツー!!」

恐るべきことに、マガワルプルギスはそれに全力の攻撃を合わせる。

オーブが聖剣の剣先をクリスタルに叩き込み、剣先から光を放つ。マガワルプルギスが全身から魔法を放ち、禍々しい攻撃の洪水を叩き込む。

攻撃命中はほぼ同時。

オーブもマガワルプルギスも、攻撃を完遂する前に吹き飛ばされた。

ウルトラマンと魔王獣の痛ましい声が重なり、両者共に立ち上がるのに時間がかかってしまうくらいのダメージを受ける。

マガワルプルギスは受けたダメージを回復すべく、手当たり次第に周囲の者を食らい始め——オーブが頼りにしていた聖剣までもを、バクンと飲み込んでしまった。

「何!?!」

オーブは驚愕し、息を呑み、されど引きずらずに形態を変えようとする。

何も、変わらなかった。

「――」

何が何やら、状況を理解できぬままに、ウルトラマンオーブはマガワルプルギスの破壊衝撃波をモロに食らってしまう。

「ぐっ……!」

地に伏したオーブは、再度自分を格闘に特化した形態に変えようとして、自分の体の表面で蠢くマガワルプルギスの闇の存在に気が付いた。

『形態変化の際に発生するエフェクトが食われている』。

『形態変化に使うエネルギーが食われている』。

それが、この異常事態の真実だった。

ウルトラマンオーブは複数のウルトラマンの力を融合させて扱える強力なウルトラマンではあるが、その運用はウルトラマンオーブと

いうポリゴンに、他のウルトラマンというテクスチャを貼り付ける形での融合となる。

ベースはあくまで、ウルトラマンオーブだ。

二分が立てば点滅する胸のタイマーも、体や顔のベース造形も、全てはウルトラマンオーブ本来の姿に沿って形成される。

今のオーブは、素の状態のウルトラマンオーブが聖剣を使うための形態だ。

ここに新たなウルトラマンの力を加えようとする、オーブに纏わりついた闇が加えようとした力を喰らい、オーブの形態変化を阻害してしまう。

この闇の中で、オーブは形態を変えることができないのだ。

明らかに、一時間前のマガワルプルギスより遥かに強い。

マガワルプルギスは、周囲にあるものを食らい続けることでその力を高め、今も止まらず捕食成長を継続していた。

「ぐあっ！」

ウルトラマンが、マガワルプルギスの体当たりで跳ね飛ばされる。

状況は、時が経つごとに悪化していった。

鹿目まどかが、魔法少女になった。
魔法少女になったまどかが、粉碎されたギャラクトロンの頬に触れる。

ギャラクトロンの碎けた頭部に、暖かな雫が落ちる。

鹿目まどかが悲しんでいる。

十分だった。

ただ、それだけで十分だった。

ギャラクトロンが立ち上がろうとし、戦いを再開しようとするには十分だった。

それは、弱者を食い物にする食物連鎖という構造を見た時、この地球にありふれている残酷な争いを知った時、ギャラクトロンの内に淡々と湧き上がった熱と似て非なるものだった。

『再起動を確認。コマンドを実行する』

「ギャラクトロン!?!」

左腕は根本から無くなった。

両足は既に粉碎されている。

体には大穴が空いており、もはや駆動系を動かすことも、攻撃用のエネルギーを抽出することも難しいだろう。

それでも、ギャラクトロンは這うように動いていた。

右腕を切り離れた後で破壊されたためか、右腕は半ばまでは残っている。

左腕も肩口を破壊され武装と共に地に落ちたものの、逆に言えば左腕の回転剣は壊れずにそこに残っている。

ギャラクトロンは唯一半ばまで残った右腕で、千切れた左腕の武装を求め、這うようにして地面の上を動き始めた。

まだ死んでいないセンサーもある。

まだ動けるだけのエネルギーがある。

ギャラクトロンは、まだ終わっていない。

奇跡的に残っていたコードではむらの声を借りて、ギャラクトロンは語り始める。

『私は、私の活動が停止するまでに、一つでも多くのコマンドを実行する』

「そんな体で……」

『この世界のために、争い全てを停止させる。それが我が使命。我が正義』

「っ」

『最優先目標、マガワルプルギスの存在をリセットする』

魔法少女達の心に浮かんだのは、憐憫であり、驚愕であり、賞賛だった。

ギャラクトロンは何一つとして変わらない。

彼は、今も彼の正義を実行しようとしている。

ほむらがギャラクトロンの口元まで駆け寄り、ギャラクトロンの穏やかな声で問いかけた。

「ギャラクトロン、あどどのくらい動ける?」

『最長で2分』

「十分ね」

ほむらは髪をかき上げる。それが、彼女の心の状態が切り替わる合図だった。

「やるわよ」

「やるって、ほむらちゃん、何を……?」

「決まってるじゃない。勝つのは、まどか。」

マミはあの左腕を拾って来て、リボンでぐるぐる巻きにしても右腕に固定して。

杏子ときやかはあそこの無事な二台のトラックを回収してきて。

魔法少女なら魔法で動かせるはずよ。

あの二台のトラックをギャラクトロンの両足にマミのリボンで固定して、即席の足にする」

「ちよつと待ちなさいよほむら! あんた、まだギャラクトロンの戦わせるつもり!?」

「ええ、彼がそう望むなら」

「こんな……こんなにぶつ壊れてるのに、戦えるわけないじゃん! もう休ませて——」

時間がないこの状況で、ほむらはさやかを黙らせるのに、その辺の石ころを銃で撃ち壊すという選択を選んだ。

銃に怯んださやかを、ほむらが怒鳴りつける。

「ネバー・セイ・ネバー!」

「——!」

「あなたがギャラクトロンの言ったことでしょう、美樹さやか!

いつもそうよ、あなたは……一度くらい、自分が口にした言葉に責任を持ちなさい!」

マミも、杏子も、既に動き出している。

さやかは舌打ちして、それからほむらの指示に従い、走り出した。「……えっちらそうに！ あんたに言われなくなつて、やってやるわよ！」

かくして、その場しのぎのギヤラクトロンの完成する。

魔法少女が魔法で操れるトラックは、ギヤラクトロンの足に。

リボンで固定された二台のトラックは杏子とさやかの担当。

右腕に固定された左腕の剣は、ギヤラクترون唯一の武器に。

ギヤラクترونを支える多量のリボンの維持は、マミの担当。

胸部にはほむら。

時間を止めることで妨害を行う担当。

肩にはまどか。

目を失ったギヤラクトロンの目となる担当だ。

継ぎ接ぎだらけで、人間がサポートに入っていなければ戦闘行動さえ行えないような、情けなくも痛々しい姿。されど、今の彼らの精一杯だ。

「おつとと、杏子！ これ本当に大丈夫!?!」

「慣れだ慣れ！ 慣れる時間もねーけど、ぶっつけ本番で成功させろ、

さやか！」

「だーもうっ！」

赤と青の魔法少女が、慣れない魔力の運用で足代わりのトラックを強化し、動かし、その上に乗るギヤラクترونを敵へ向けて疾走させる。

「ぐっ……私の負担が大きけれど、失敗はできないわね……！」

マミは右腕部分と両足部分で、数万トンにも及ぶ重量をリボンだけで支えるも、その見事な技量と気力で見事に固定し続ける。

「マガワルプルギスまで、残り500m……」

ほむらは接近中、何度も何度も時間を止めた。

時間を止めるたび、オーブと殴り合っているマガワルプルギスはその時間を捕食しようとする。捕食に一手使い、捕食一回分の時間を使ってしまう。

ほむらは小刻みに何度も時間を止めることで、マガワルプルギスに

餌を撒き、食欲を第一とするその行動原理を読みきった上での妨害を行っていた。

「もうちよつと、もうちよつとだよ、ギヤラクトロンくん」

まどかが距離を測る。

ギヤラクトロンが右腕に固定された剣を構える。

まどかの魔力がほんのりと覆うギヤラクトロンの巨大剣は、オーブとの激突で今にも崩壊しそうになっているクリスタルを狙っていた。

マガワルプルギスは、それを目ざとく見抜いたようだ。

オーブとしのぎを削り合いながら、額の肉を再生し始めた。

オーブの槍の一撃を食らう前の、クリスタルを肉で守っていた状態に戻そうとしているのだ。

それを、オーブが止める。

オーブはマガワルプルギスに組み付くようにして、再生する肉の合間に両手を突っ込む。

そして袋を開くようにして、額の肉の割れ目を更に大きく押し広げた。

「やれっ！」

マガワルプルギスを超える闇が一瞬、ほんの一瞬のみオーブを包み込み、その姿を暴虐の化身へと変貌させる。

魔王獣の闇の中でさえも際立つ漆黒……本物の闇が光と混じり合い、凶悪で強大な力をオーブのその身へと宿した。

黒き王の祝福を受け、オーブは隆起した筋肉を用いて、肉を開き更にクリスタルを露出させる。

オーブは叫んだ。

「——お前が決める、ギヤラクトロンッ！」

咆哮し、暴れ、攻撃を四方八方へと撒き散らすマガワルプルギス。

攻撃が一番近くに居たオーブを止めどなく襲い、接近していくギヤラクトロンにも命中し、ギヤラクトロンに寄り添う魔法少女達の肌をもかすめていく。

なのに、誰一人として臆することはなく。

皆の勇気が、マガワルプルギスの最後のあがきを突破した。

ギヤラクトロンの剣が、マガワルプルギスの額のクリスタルに刺さる。

「……！ 足りない！ 浅いわ！」

刺さりが浅い、と真つ先に判断したのは巴マミ。

真つ先に動き出したのは、佐倉杏子と美樹さやかだった。

「じゃあ、浅くなければ！」「いいんでしょっ！」

魔力をありつたけ込めて、剣と槍をギヤラクトロンの剣に叩き込む。

ギヤラクトロンの剣が、クリスタルに少しだけ深く食い込んだ。

「ティロ・フィナーレ！」

マミの砲撃がギヤラクトロンの剣に叩き込まれる。

ギヤラクトロンの剣が、クリスタルに大きく深く食い込んだ。

「これで、本当に、打ち止めよ！」

ほむらが溜め込んでいた爆薬を、全てギヤラクトロンの剣に投げつけ爆破する。

ギヤラクトロンの剣が、クリスタルに少しだけ深く食い込んだ。

あと少し、あと少しだけ、食い込めば。

そうして最後の一瞬に、ギヤラクトロんとまどかが残る全力を振り絞る。

「——光をつ！」

まどかが弓より放った光が、ギヤラクトロンの全力で押し込む剣を、更に押し込んだ。

剣はクリスタルを貫通し、マガワルプルギスの頭を貫き、そのまま全身を貫通する。

剣はマガワルプルギスに光を注ぎ、その肉体を内から崩壊させ、爆焔に似た光を産み——それが、マガワルプルギスとギヤラクトロンの最期となった。

自分の命を永らえさせるために他の命を奪うような低レベルの文明に価値はない、とギヤラクトロンは常に主張している。

彼はその主張の通りに、自分の延命のために他の命を奪うことはしなかった。

延命しないまま、壊れていって、終わっていった。

「ギヤラクトロン……」

勝利を迎えたというのに、魔法少女達の表情は暗い。

仲間を一人失った。

ただそれだけのことで、彼女らの胸はこんなにも痛んでいる。

機械が壊れただけじゃないか、なんて言う者は誰も居ない。

彼女らは、あの物騒なシビルジャツジメンターを、いつからか本物の仲間だと思ってしまうようになっていた。

仲間だと思い始めた時期に差異はあるだろう。

各々がギヤラクトロンに抱いていた想いにも違いはあるだろう。

だが、彼女らの胸の痛みと喪失感だけは、寸分変わらず同じであった。

「……」

ウルトラマンオーブは、その沈痛な空気に何も言わない。何も言えない。

されどその瞳が輝くと、ウルトラマンの目が持つ透視能力が発動し、ギヤラクトロン内部で奇妙な動きをしている機械を発見した。

ギヤラクトロンの残骸の奥深くにあるそれを、オーブは指先から放つ光で指し示す。

まどかが、その光に応えた。

涙でぐちゃぐちゃになった顔を手袋で拭き、ギヤラクトロンの残骸をかき分けて、その奥にある機械を見つける。

それはコードの付いた機械の箱。

まどかはギヤラクトロンの胸部にて、ほむらや杏子が耳の穴にそのコードを突っ込まれているのを何度も見ていた。

止めるほむらの声を振り切って、まどかはコードを耳に差し込む。

「……あ」

すると、頭の中に情報が流れ込んで来る。

それは、ギャラクトロンが今日まで密かに続けていた、別宇宙のギャラクトロンと通信しようとする行為の詳細なログだった。

昨日まで、ギャラクトロンは他宇宙に同族を見つけられていなかったらしい。

だが今日になって、一体のギャラクトロンとデータのやり取りをしていたようだ。

その他宇宙とのデータのやり取りが、今この瞬間に完了した。

「ええつと、これは、通信のデータ？」

「鹿目さん、どうしたの？」

「ちよつと待つて下さい、マミさん……これは……ムルナウ？　宝石の魔女、ムルナウ……？」

「ちよつとちよつとちよつと、何言つてんのさまどか？」

ムルナウ、宝石、とまどかは口々に繰り返す。

そして、叫んだ。

「こ、これ！　人間や物や光を宝石にする魔法と！

宝石になつたものを元に戻す魔法のデータだよ！」

「！？」

それは、魔法少女の祈りが起こした奇跡ではなく、命の絆が引き寄せた奇跡でもなく、ギャラクトロンが淡々と続けていた機械的アプローチが繋げた、必然の奇跡だった。

「じゃ、じゃあそれって！」

「魔法少女のソウルジェムを、元の魂に戻して元の体に戻せるってこと！」

「ははっ、マジかよ……そんなんアリかよ……！」

かつて、遠い宇宙に、ムルナウおばさんという宝石の魔女が居た。

ムルナウおばさんはギャラクトロンの生産工場に忍び込み、余計なAIが積まれる前の個体を盗み出して改造し、万物を宝石に変える機械竜として新生させた。

彼女が宝石に変えたものは、戦いの後全てが宝石から元のものへと戻つたという。

「……本当に」

ほむらは砕けたギャラクトロンの頭部を見上げ、呆れた顔で溜め息を吐いた。

「本当に最後の最後まで、あなたは否定ばかりだったわね。

食物連鎖という円環は間違ってる。

魔法少女と魔女の円環は間違っている。

誰かが誰かを食い物にするのは、争いの元凶だから、あつてはならないと……」

その言葉には、一種敬意すら感じ取れる。

まどかは逆に、嬉しさと悲しみが混ぜこぜになってしまったせいで、泣くことも笑うこともできなくなってしまっていた。

「これは、ギャラクトロンくんの最後の抵抗だよ。

せめて、せめて魔法少女の連鎖だけでも、この宇宙から消し去りたいてってお願い……」

ギャラクトロンは、まどかに行動を制限されてなお、気に入らないものをこの宇宙から消し去ろうと頑張っていた。

本当に筋金入りだ。

「……へっ、余計なお世話だったの。最後まで押し付けがましい言い草の野郎だよ」

杏子はぶつきらぼうに、けれど寂しそうに、ギャラクトロンの顔を見上げる。

「……」

ママは目を瞑り、俯き、ただ何も言わず、ギャラクトロンに黙祷を捧げ続けた。

「あの、バカ……ばかあ……」

さやかはギャラクトロンを罵倒するも、その声はどんどん涙声になっっていく。

「お疲れ様、ギャラクトロン」

ほむらの小さく細い手が、ギャラクトロンの砕けた頬を撫でた。

ギャラクトロンはもう動かない。

「あなたは最後まで善ではなく、優しくもなく、暴走するだけの正義

だっただけだ。

善でもなく、優しくもなく、正義にもなれないのは、私も同じだったから……」

ギヤラクトロンはもう何も応えない。

「……あなたのこと、そんなに嫌いじゃなかったわ」

ほむらのその言葉を聞き、ウルトラマンオーブは空を見上げ、空へと飛び去っていく。

空には夕日。

吹き飛ばされた雲の向こうの夕日の向こうに、ウルトラマンは消えて行った。

夕日を越えて、彼も自分の宇宙に帰るのだろう。

今日もどこかで、夕陽の風来坊の助けを呼ぶ声がする。

黒き少女の祝福

あれから、数年が経った。

美樹さやかは魔法と縁の無い生活を送り、今は地方のちよつとばかり偏差値の高い大学に通っている。

彼氏も居る。

大学で出来た友達も居る。

あれから数年、さやかにも大切な思い出は増えた。

けれども、魔法との出会いに始まり、ギャラクトロンとの別れに終わったあの激動の二週間の思い出は、その中でも特に鮮烈に輝いている。

「お、さやかじゃん。久しぶり」

「おはよう杏子。久しぶりって、先週会ったばかりでしょうが」

「あり、そうだったか？」

最近はずっと時間合ってたんだな、あたしら」

「あたしは大学。杏子はバイト？」

「へへっ、聞いて驚くなよ？」

最近上のオッサンに気に入られてさ、正規雇用扱いになったんだ」

「マジで!?! やったじゃん!」

「まあ見滝原に居るのは変わんねーけどな。ちよつと給料は増えたね」

時は流れる。

見滝原からいくつかの建物が消え、いくつか建物が増え、風景が変わった。

公園が一つ消え、森林が住宅街になり、子供達の遊ぶ場所も変わった。

マガワルプルギスがもたらした街の破壊の跡も跡形も無く消え、まどかとさやかの行きつけの店もいくつか潰れ、彼女らの思い出は街からゆっくりと姿を消していく。

さやかも杏子も、大人になっていく。

「今日晩御飯マミさんと一緒に食べる予定んだけど、杏子も来る？」

あたしが泣いたくらいじゃ、あいつはなんとも思わないんだろうけどさ。

それでも、悲しんでることを形にしてやった方が良かったんじゃないかって。

……入力された命令に従ってるだけのロボットに何言ってるんだ、って笑ってくれ」

死した仲間をどう送ってやるべきだったか、という部分で後悔しているのは、元々教会の生まれである杏子らしい思考だろう。

対し、さやかはギャラクトロンに杏子とはまるで違う感情を抱いていた。

「アイツは入力された命令に淡々と従うようないい子ちゃんじゃないよ」

「まあ、そうだな。もつと物騒なやつだった」

「アイツは入力された命令を自分なりに解釈してた。

自分なりに選択して行動してた。

多分さ、だから普通に道具として使うには面倒臭いロボットになっちゃったんじゃないかな」

「さやかはそいつが、ギャラクトロンの捨てられた理由だと思ってるってわけだ」

「まーね。

だってそうじゃん？

普通ロボットの扱いに困って捨てるなんてことにはならないよ。

ロボットなんて普通命令されたことだけやるもんだし。でも、アイツは普通じゃなかった」

機械とは従順なものだ。

機械とは入力された命令だけを実行するものだ。

兵器とは人の意図した以上の結果も以下の結果ももたらさないものであることが望ましい。

けれど、ギャラクトロンはそうではなかった。

「アイツはただ、嫌いだった、ただそれだけだったんだとあたしは思う」

「嫌い？ 何がだ」

「誰かと誰かが争つてることが、さ」

製作者の思い通りに動かない欠陥兵器だったからこそ、ギヤラクトロンはこの次元に捨てられてしまい、この世界の悲劇を皆殺しにしました。

「だから、優しい奴でも生きていくために何かを殺さないといけな
いってことが……」

戦いを望んでない奴でも、強制的に何かを食わないと生きていけな
い世界が……

食う者と食われる者が分かれてるってことが、心底気に食わなかつ
たんじやないかなって」

さやかは、ギヤラクトロンは嫌いなものを壊していっただけだと想
像する。

魔法少女と魔女の仕組み、インキュベーター、マガワルプルギス、人
の心を痛めて争いを生み出すもの、目につくそれらを片っ端からギヤ
ラクトロンは壊していった。

争いを否定する聖女ですらも、他の命を食べて生きているというこ
の星は、『誰も争わず、誰も傷つけられない世界』を理想とするギヤラ
クトロンからすればまさしく地獄。

数年前よりちよつとだけ背が伸びて、ちよつとだけおしとやかに
なったさやかは、ギヤラクトロンの気持ちを少しだけ理解できるよう
になっていた。

「で、それでどうすんだ？」

ギヤラクトロンの奴に気い使って、ベジタリアンにでもなんのか
？」

「まっさかあ。っ(飯美味しいし、あたしには無理だよ」

理解はすれど、賛成はしない。

賛成はしないが、理解はした。

だからさやかは、ギヤラクトロンに賛同しないまま、ギヤラクトロ
ンの影響を受けて、将来の進路を決めることにした。

「でも、ま、就職先はちよつと考えて選ぶことにしたよ」

「自然保護活動でもすんのか？」

「秘密！」

にしし、と笑ってさやかは駆け出していく。

分かれ道で二人は別れた。

進む道は別で、歩く道も別で、向いている方向も別。さやかと杏子は別々の道を歩んでいく。

さけれど、心はいつも共にあった。

雪降る街で、マミはキュウベえにマスクットを突きつける。

真っ白なキュウベえの体の大半が、雪の景色に保護色代わりになって溶け込んで、真っ赤な目が怖いくらいに際立って見えた。

「見事だ、マミ。」

僕が正真正銘、最後の個体となったインキュベーターだよ。

君がその引き金を引けば、君達はめでたく僕らを絶滅させたことになる」

「そう」

ギャラクトロンが絶滅寸前まで追い込んだインキュベーターは、魔法少女達の手によって——主に、マミの手によって——その最期を迎えようとしていた。

「僕らも滅ぶことに憂いはない。

まあ、僕らも絶滅するのは喜ばしいことでは無いけどね。

まどかは別宇宙から『光』を呼んだ。

あれは宇宙を超える奇跡だ。

絶望を希望へと相転移させたあの奇跡は、宇宙を救済するには十分なエネルギーだったよ」

僕らは果たすべき役目を終えたんだ、とキュウベえは微笑む。

「あなたを見ていると、よく分かるわ。

”助けてくれ”と命乞いをする人が、醜くともどれだけ真つ当なのか。

死にたくないと呼ぶことができない人に、犠牲になる人の痛みは決して分らない」

「僕も君も同じさ、ママ。」

君には感情があり、僕には感情がない。

君は僕を完全に理解できないし、僕は君を完全に理解できない。

いや……君達人間は、人間同士ですら互いを完全に理解できないんだったね」

「だから私達は、相手の痛みを想像して、行動を思い留まるのよ。完全に理解できなくても、ね」

今、魔法少女の真実とキュウベエの正体、及び魔法少女をただの少女に戻す術式のデータは急速に世界中に拡散されている。

インターネットという媒体を通して、今や世界中の魔法少女が繋がっていた。

「人間らしい思考だ。」

君達がインターネットというものを生み出したのも、遠くの誰かと繋がるためだろうか？

インターネットというものは、人間きみたちにとって珠玉の発明と言えるだろうね」

「ソウルジェム、グリーンフィード、キュウベエ……」

魔法少女しか使わないワードは、いくつもあるもの。

検索で魔法少女を見つけるのも、魔法少女に見つけられるのも、そんなに難しくなかったわ」

「後は根気の問題、というわけだ」

「方向性の問題、でもあるわ。」

だって魔法少女はわざわざキュウベエを見つけて殺す魔法なんて作らないでしょう？

そんなこと考えもしないもの。

でも、ひとたびキュウベエを敵と認定したなら、私達はそういう魔法を作りもするわ」

「だろうね。合理的だ」

孤立環境であるがために、今の世界の動きを何も知らない魔法少女も居る。

魔法が全て消えるまでは人間に戻らない、という魔法少女も居る。魔法をまだ悪用していたいから余計なお世話だ、という魔法少女も居る。

そんな悪の魔法少女を止める抑止力で居続ける、という魔法少女も居る。

だがいずれ、全ての魔法と魔法少女は地球上から消えるだろう。

ギヤラクトロンは魔法少女と魔法の円環を破壊した。

魔法少女をいつでも辞める権利がある、ということはそういうことだ。

「他次元宇宙からの来訪者が全てを変えていくとは、僕も流石に予想外だ。

ギヤラクトロンは壊していった。

光の巨人は守っていった。

特にあの光の巨人は凄まじい。

あれはおそらく、信仰や希望から光の感情を抽出し、自分の力に変えられる生き物だよ」

「……他人から感情を受け取るだけで、生きていけるっていうの?」

「そうさ。一言で言うなら、あれは”心の光を糧に生きる生き物”なんだろう。

ギヤラクトロンが言うところの『間違っていない生命』とは、おそらくあれを指すんだろうね」

奇しくも、まどかの祈りによって、キュウベえはギヤラクトロンに対する『正解』である光の巨人を観測・分析することができていた。

まさに次元が違う強さだった。

彼が来なければ、勝機などまるで無かっただろう。

だがキュウベえは、その強さになどまるで興味がなかった。

「何も殺さず生きていける。

光があれば生きていける。

ただ他の命を助けるだけの生涯を送っていける存在。

まさに理想的だよ。

彼らは生きるために戦う必要がなく、食うために殺す必要がない。光さえあればいいわけだからね。にもかかわらず、君達という弱者を助けに飛んで来た」

「あれを、正義の味方と言うのかしら？」

「さあ。もつと俗物的なものかもしれないし、もつと聖なるものかもしれない」

観測と分析だけじゃそこまで分からないさ、とキュウベえは瞳を閉じた。

「僕や君とは根本的に違う生命体だよ。」

僕は宇宙の延命に少数ながらも命を費やし、それを肯定した。

君達人間は言わずもがな、だね。それはギャラクトロンが指摘した通りだろう」

「……」

「あれは僕らの魔法少女システムの、ある意味究極系だ。」

なんでもない人の心の光を集め、星をも砕く力を発することもできるだろう」

光の巨人も、キュウベえも、一点を見れば類似している。

それは、何の才能も無い子供でも、その心の光には力があると証明できるということ。心の力で世界を変えることができるということだ。

ただし、それを理由に子供を宇宙のための人柱にするキュウベえと、子供を守ろうとする光の巨人では、最終的な方向性は真逆となる。「分かるかい？ マミ。」

君達がギャラクトロンの裁きの対象から外れるためには……

地球人は、いつかあの光の巨人に追いつかなくてはならないということだ」

「素敵ね。なら、私達はそこを目指すことにするわ」

「困難な道だ」

「望んだ道よ」

「君は光を追うのかい」

「追うのではなく、光になるのよ。」

誰かを照らす光になりたい。魔法少女なんて、大体そんなものだもの」

「マスキットの引き金に、指がかけられる。」

「さよなら、キュウベえ。」

私が一人ぼっちだった頃、一緒に居てくれてありがとう。大嫌いのよ」

「さようなら、マミ。君はとても優秀な魔法少女だった」

ドン、と砲火が額を撃ち抜く。

一つの終わりを迎え、マミは空を仰ぎ見た。

これを機に魔法少女を辞めてしまおうか、と少し思う。

■■■■■■■■■■

「ねえ、約束して」

「私達が魔女になったら、私達が誰かを殺す前に、私達を殺してくれるって」

「私達が希望を振り撒く存在から、絶望を振り撒く存在になる前に、私達を止めて欲しい」

■■■■■■■■■■

果たされない約束があった。

もう何がどうなるうとも、その約束は果たされない。

それでも、ギャラクトロンに何の断りもなく魔法少女を辞めるのは、なんとなく申し訳ない気持ちになって、気が引けてしまった。

魔法少女を辞めることで、自分から約束を破ってしまうことが、なんだか嫌で。

巴マミは大学生になってもまだ、魔法少女を続けている。

鹿目まどかは一軒家の横に置かれたガレージの中に足を踏み入れる。

長い髪を赤いリボンでポニーテールに纏め、髪を纏めないと汚れてしまう作業をしている、暁美ほむらの背中が見えた。

ほむらはまどかの足音を聞き振り返り、まどかと目を合わせて微笑んだ。

「いらっしやい、まどか」

「お邪魔してます、ほむらちゃん」

パンパンと服の汚れを払いながら、ほむらはドライバー片手に立ち上がる。

一緒の大学に行きたかったな、とまどかは益体もなく考えるが、ほむらには大学に行くよりも大切なことがあった。

「そろそろ完成しそうって言ってたけど、どう？」

「とりあえず暫定だけど、完成よ。まどかもいいタイミングで帰って来たわね」

「本当!？」

「今日に終わってしまったら、明日の有給がまるで意味の無いものになりそうだわ」

まどかがドキドキしながらガレージの奥を見ると、そこには2mサイズのギヤラクトロンが立っていた。

……ほむら視点、苦労に満ちた数年だったと言える。

ギヤラクトロンの残骸を全て集め、選り分け、整理するだけで一年かかった。

ギヤラクトロンのパーツの中で人工知能を成立させる部分を見つけた頃には、中学校生活が終わってしまっていた。

努力だけではどうにもならなくて、金で他に調査機械・検証機械を買う必要があつて、仕事もちゃんとやって金を貰つて。

機械の仕組みを学んで、ギヤラクトロンの新しい体を作って、そこに元のギヤラクトロンの知能を組み込んで、起動しなくて試行錯誤して。

ギヤラクトロンが暴走しないよう、ちゃんとリミッターも付けて、

武装は持たせないようにしつつも以前と同じ姿にして。

「気付けば、中学生だった友人達は大学生になっていた。」

「おめでとう、ほむらちゃん」

「まだ完全に完成したか分からないわ。気が早いわよ」

「えへへ、でもね、私達ずっと凄いなって思ってたんだよ。」

「ほむらちゃんは本当に根気強くて、ずっと頑張ってたから」

「……そうでもないわ」

ほむらが照れた様子で髪をかき上げ誤魔化そうとして、髪を纏めていたことを思い出して、恥ずかしそうに手を後ろに回す。

誰もが音を上げるような不毛な作業でも、長々と延々と頑張っている根気強さが、暁美ほむらの長所で強みだ。

一定のラインを越えると意地になっていつまでも頑張り続ける、とも言う。

希望をもって挑み、絶望の結果に裏切られても、彼女はコツコツ積み上げ続ける。

無知な中学生だった彼女が、たった数年で他次元文明のロボットを曲がりなりに修理してみせたのだから、この数年の密度は推して知るべしといったところか。

なにはともあれ、ほむらは意地を通して道理を突破したようだ。

「これで起動したら、ほむらちゃんが起こした奇跡だよ」

「私もまだ魔法少女よ。夢と希望を叶えるのが魔法少女、でしょう?」

「うんうん」

ほむらの解答は、まどか的には百点満点だったらしい。

大学の通学カバンを抱きしめたまどかが、喜ばしそうにうんうんと頷いている。

「まどかに、巴さんに、杏子に、さやかに……」

皆が協力してくれたことにも、感謝してる。一人じゃここまで来れなかった」

「わあ、ほむらちゃんが素直に皆に感謝してる……」

「何? おかしい?」

「うん、それもほむらちゃんらしさだよ。」

でも感謝の気持ちがあるなら、皆に一人一人ちゃんとお礼を言っていって欲しいな」

「……努力はするわ」

こっちの解答は、六十点くらいだったらしい。

まどかは目を逸らすほむらを、微笑ましいものを見るような目で見つめていた。

「スイッチを入れて起動してみるわ。

まどか、呼びかけてみて。

ギヤラクトロンのAIが起動すれば成功、起動しなければ失敗よ」

「え？ 私が？ ほむらちゃんはやらないの？」

「希望や、奇跡や、光っていうものは……きっと私よりあなたの方を好んでいるもの」

そんなことはないと思うけどな、と思いつつも、まどかはその頼みを請け負った。

ほむらはいつでも、奇跡はまどかの下にやって来ることを知っている。

ギヤラクトロンのまどかの声にいつも応えて来たことを知っている。

「ギヤラクترونくん？」

ほむらはまどかを信じ、ギヤラクترونを信じ、この声掛けが奇跡を起こすことを信じた。

知っていたのではなく、信じた。

『——私は、私に与えられた、いくつものコマンドを実行する』

「ほむらちゃん！」

「……よしー！」

ぐつと拳を握り、過去の全てを噛みしめるほむらに、まどかが感極まって抱きつく。

ほむらはまどかから離れ、最後のループを共にした戦友にかける言葉を選んだ。

ギヤラクترونは、ほむらの最高の友達でもなく、最高の理解者でもなく、最高の肯定者でもない。だが、最高の戦友ではあった。

「ギャラクトロン、私が……いえ」

ほむらは自分が主人だ、と言おうとして、言い直す。

「私とここに居るまどかが、あなたの主人よ」

『了解しました』

それは、ほむらなりのこだわりだった。

これまでの戦いが、各々の主張が、目を閉じたほむらの脳裏に蘇る。キュウベえは自分の延命ではなく、宇宙の延命のために人柱を立て続けた。

それは、食物連鎖の外側からその連鎖が成立するよう調整を施すよ
うなもの。

宇宙を頂点とした食物連鎖を肯定するそれは、見方によっては独善
だ。

見方によつては大局的だ。

何にせよ、犠牲になる者のことを何も慮っていない。

それを地球の生態系ごと否定したのが、ギャラクトロンだ。

マクロな視点で見れば、食物連鎖は肯定して然るべきものだ。

ミクロな視点で見れば、食物連鎖を肯定することはできない。

食物連鎖とは、どこかの誰かが弱肉強食の犠牲となるということであり、一を犠牲にして全の循環を維持するということを繰り返すという
こと。

大きな動物が小さな動物を捕食し、その口の中で小動物が「痛い」
「助けて」と叫ぼうとも、それは食物連鎖の流れを構成するものである
がゆえに、肯定されなければならない。

それがどんなに残酷でも、肯定されなければならない。

『残酷』こそが世界を回す。それが条理だ。

暴走する正義は全てを破壊する。

シビルジャツジメンターはいつとて、搾取者を裁くために存在する
のだから。

その対象がインキュベーターでも、人類でも構わない。関係がな
い。知ったことではない。

裁きの剣は躊躇わない。

優しい正義が弱者の味方なら、暴走する正義はいつとて強者の敵となる。

食い物にされているのが弱者で、食い物にしているのが強者だ。魔法少女を食い物にする立場的強者を、ギャラクトロンは許さない。

かつてのギャラクトロンは、その在り方を変えなかった。

これからのギャラクトロンがどうなるか、それは誰にも分からない。

「きゃっ、虫!？」

まどかが変な声を上げる。

ほむらはまどかを驚かした虫を潰すべく、ハエ叩きを振り上げ……それが振り下ろされる前に、勝手に動いたギャラクトロンがほむらの腕を掴み止めた。

『無益な殺生は回避することを推奨します』

「……私はあなたの主よ？ 主に意見するの?？」

『存じております。意見もします』

ああ、”争いを止めたんだ”と思つて、まどかは思わず吹き出してしまふ。

「ぷっ」

こらえようとするがこらえきれない。

吹き出したまどかを、ほむらが少し怒った顔で睨みつけた。

「あははははは！ うん、これは間違いないギャラクトロンくんだ!？」

「まどか!？」

「ごめんね、ほむらちゃん、でもおかしくて!？」

『胸が無い方の主。ご命令を』

「その呼称は何!？」

……ああ、私達の名前を入力してないからそうなったの?？」

私は暁美ほむら。こっちの子は鹿目まどか。今度からはちゃんと名前呼びなさい」

『了解しました、ほむら様。お守りします』

「よろしい」

ほむらが満足げに頷いていると、誰かが呼んだわけでもないのに、ぞろぞろと見知った顔がガレージの中に入ってくる。

「ほむら居るー？ 暇なら一緒に晩飯でも……うわああああ!」
さやかが叫ぶ。

「どうしたさやか、女捨てた悲鳴してんぞ……って、オイオイ、マジかよ」

ポツキーを啜えた杏子が、ニヤリと笑う。

「佐倉さん、美樹さん、どうしたの……って……あ……ああっ！」
マミが、口元を抑える。

『この世界のために、争い全てを停止させる。』

別の世界でもそうさせてきたように、全ての争いを止める。

まずは主を守り、ありとあらゆる争いを否定する。それが我が使命。我が正義』

ギヤラクトロンは、相変わらず製作者の思い通りのままであり。

争いを止めるために頑なになる、面倒臭いロボットのままであり。

自分の正義を疑うこともなく、自分が間違っていると想像すらしないけれども。

人が、機械が、地球の文明が、未来にどうなっているかなんて、誰にも分からない。

繰り返された過去は、暴走する正義を間に挟み、不確定の未来に繋がっていった。